

---

# 人間フルスペック

維川 千四号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人間フルスペック

### 【Nコード】

N4759M

### 【作者名】

維川 千四号

### 【あらすじ】

“普通の少年・葛平七生”はある日“クラスの人気者・雛村美月”を町で見かける。しかしそこはおおよそ普通の人間が立ち寄る場所ではなくて……。

\*\*\*電撃大賞一次選考“不”突破作品堂々公開\*\*\*

感想・批評、大募集中です！是非ともご協力お願い致します！

## 1・01(前書き)

どうか、水温32 くらいの生温い目で読んでやってください。

はじめまして。

あなたにとつての『おはよう』か。

あなたにとつての『こんにちは』か。

あなたにとつての『こんばんは』か。

.....。

ちなみにこっちは『こんにちは』。

って言つても実感ゼロだけ。

外が見えない室内つて、長時間いると時間感覚狂いませんか？

俺だけ？

外出たら「うわ、もうこんなに暗いの？」みたいな。

まあ。時間的にも季節的にも、まだそんなに外は暗くないだろうけど。

.....いつ出られるかも分からないし、その頃にはもう明るくなっているかも知れないけど。

3

遅ればせながら、自己紹介。

名前は葛平七生<sup>くすひらななお</sup>。年齢、十七歳の高校三年生。かに座のA型。趣

味は、特になし。特技.....と呼べるものも、特になし。まあ、どこにでもいるような、普通の男子学生、だと思います。

ところで話は変わりますが、『鬼ごっこ』ってやったこと、ありますか？

ベーシックの他に『いろ鬼』とか『たか鬼』とか『こおり鬼』とか俺が知っているのはこのくらいだけ。

もっといっぱいあるんだろうけど。

その全てのどれにも俺が今、参加している いや、参加させられている『鬼ごっこ』は当てはまらないと思う。

鬼が本当に赤い鬼のお面（節分に使うような安物のプラスチックのもの）を着ける『鬼ごっこ』を。

鬼が金属バット片手に走ってくる『鬼ごっこ』を。

まさしく鬼の形相で追ってくる『鬼ごっこ』を。

まさしく鬼気迫る勢いで追ってくる『鬼ごっこ』を。

こんな『鬼ごっこ』を、俺は知らない。

十八年近く生きてきて、今のところ知らない。

とりあえず、何故こんなことになっているかを、俺は思い出すべきだろう。

「ああ、これでやっと僕も大人の仲間入りだ。これまで、本当に長かった」

少し瞳を潤ませながら、明日木翔太あすきしょうたはそんなことを俺に言った。

「そんなに感動することか？」

「何を言ってるんだ君は！ 事の重大さがまるで分かってない！」  
まったく、と続けた。

「もしも僕の両親が生きていたら、僕が初めて立ち上がったときみたいに喜んでくれるはずさ」

「自分の両親を勝手に殺すなよ」

「……そういえば確かに、今日も元気に仕事に行ったね」  
今まさに思い出したかのように言って、さらに、

「可愛い息子のために働き蟻の如く」  
と付け足した。

「……養ってもらっている人間とは思えない発言だな。しかもその給料がこんな風に使われるとは」

心中お察しします。

お悔やみ申し上げます、でもいいかも知れない。

「心外だな。僕は男として、いや、人として、いや、僕自身としてレベルアップするために大切なお小遣いを有意義に使っただ！」

「……………」  
「……一体どれだけレベル上がるんだ？ このイベント。」

しかもストーリーには全く影響のないサブイベントだ、間違いなく。

多分『迷子の子犬を探せ』的な、クリアしなくても全然問題ない、むしろ途中で忘れてしまうようなイベントだ。

「期末テストさえなければ、もっと早く来られたのに 悔やまれ

るばかりだ」

……ああ、そうかよ。

お前はその程度のことを悔やんでいるのか。

俺は今日の最後の英語の四択問題が、悔やんでも悔やみきれないよ。

何故、『A』と書かなかった。

何故、深読みをした。

何故、裏をかいた。

何故、相原（今回のテスト作成担当の英語教師）の意地悪な引っかけ問題だと思った。

何故、素直に育たなかった、俺！

かに座のA型、葛平七生！

……確か、今日のかに座は1位のはず。

今朝、家を出る前にテレビで『今日の星占い』を確認したはず。

アユミン（巷では人気女子アナと呼ばれているらしい）が言っていたはず。

アユミン（世間には実は妖精だという説もある）が可愛らしい笑顔で「おめでとございます。今日の1位はかに座」と言っていたはず。

アユミン（どこかの誰かは女神だと噂している）の癒し系ヴォイスの「今日も元気に行ってらっしゃい！」を聞いて家を出たはず。

そうさ。占いの内容だって一字一句間違いないと思わせる。

「今日一日ハッピーに過ごせそう。もしかしたら運命の出会いがあるかも。だけと思わぬ落とし穴にご注意」

ほら。

俺には今朝見た、その笑顔も、その声も、脳内再生できるじゃないか。

……………。

……。  
……落とし穴？

……落とし穴、って言いました？

……まさか、あの問題が？

ははは。アユミン（もしや俺の夢じゃないかとも思える）が言っていたんじゃないか。

ならば、占い通りじゃないか。

もはや、予言通りじゃないか。

「……って、聞いて……ないよね？ 僕の話」

突然、明日木の声が耳に届いた。俺を現実に引き戻すように。

くそつ。せつかくのアユミン（もはや俺の夢）とのランデブーを邪魔しやがって。

しかし、そんなことは俺は口にしない。

「悪い。全く聞いてなかった。何の話だった？」

まったくもう、と嘆息してから、

「期末テストの話から、夏休みの予定の話になって、燃えると萌えるの違いの話を經由して、そこから君の妹君がこないだ男の子と手をつないで歩いていた話になって、そのついでに相対性理論にも少し触れて、最後に僕の新奥義の話になったんだよ」

さらりと、まるで枕草子でも詠むかのように言い切った。

「……よし。色々突っ込みたい気持ちここは堪えよう。俺も、もう大人だ……」

そうだ。もうすぐ十八だ。

そして、一度呼吸を整えて。

吐き出すのに必要なだけの空気を取り込んで。

「妹が男と手をつないでただと！ どこのどいつだ？ どこの馬のどこの骨だ！？」

怒鳴った。

大いに、人目をはばからずに怒鳴った。

一瞬だけ周囲の注目を浴びた。

「うーん。オグリキャップの大腿骨って感じかな」

とりあえず至極冷静に言い間違いにも乗っかって、

「僕も遠くから見かけたただだから、顔は見えてないけど、背が高くてシュツとした　いわゆるモデル体型な子だったよ」

それこそオグリキャップの大腿骨みたいな、と再度乗っかってきた。

……いや、俺にはオグリキャップの大腿骨がシュツとしているのか、分かりかねるのだが。

「もしかしたら、オグリキャップみたいな顔かもね」

……。

……頼むから、それだけは勘弁してくれ。

「下手をしたら、オグリキャップみたいな体かもよ」

「妹はサジタリウスと付き合うような馬鹿じゃねえ！」

「別に手をつないでいただけで、サジタリウスと付き合っていると限らないだろう」

「サジタリウスと仲良く手をつないでいる時点で百点満点の馬鹿だ！」

付き合っていたら二百点満点だ。

「誰も『仲良く』なんて言っていないじゃないか。あれはそうだな……」

『仲睦まじく』って雰囲気だったね」

……。

……はい。三百点突破。

というか、元より相手はサジタリウスではないけど。

だけど、いつそサジタリウスの方が良かったかもしれない。人間よりは。

もしかして娘が結婚するときの父親の気持ちって、こんな感じなんだろうか。

いや、娘じゃなくて妹だが。

「妹君も高校生なんだし、彼氏の一人や二人や三人や四人くらい、いても不思議じゃないじゃないか」

それは不思議どころか、摩訶不思議だ。

摩訶不思議アドベンチャーだ。

集めた球の数だけ彼氏ができるのか？

それなら、頼むから四星球だけにしといてくれ。

「それとも君はアレかい？ 妹独占主義かい？ 君にそんな属性があつたとは気付かなかつたけど」

「気付かなかつたも何も、俺にそんな属性はない」

「ああ。義理の妹専門だったね」

「義理だろつが本物だろつが、妹自体に興味はねえ！」

サジタリウスのは気になるけど。

「確かに……君の妹君は胸とかばかり成長しちゃって、色気には欠けるかもね」

「よし！ 今から俺は二つの理由でお前を殴る！」

妹の色気を否定した罪と、妹をそういう目で見ていた罪（矛盾しているのは重々承知だ）。

どちらも極刑だ。

「待ってくれ。何かの誤解だ。僕は小娘に興味はない。大人の女性専門だ。君みたいにロリコンじゃないんだ。だから、命だけは。命だけは！」

……………。

……… 刑罰さらに二つ追加。

来世でも極刑だ。

「ま。帰ったら直接訊いてみればいいさ」  
 結局、今日一番の爽やかな笑顔で明日木はそう結論付けた。

「……………」  
 「俺がその手のことを苦手にしてしまうと知っていて。  
 「それにいい加減、お話を前に進めないかね」

……………  
 何の話だ、と訊いたら、こっちの話さ、と答えた。

「さらに言うなれば、こんなところで雑談に興じている男子高校生も場違いだしね」

猥談ならまだしも、と爽やか笑顔で加えた。

もちろん俺にはそれに参加する義理は、妹以上はない。  
 しかし俺にはこの話を進める義務は、妹以上にある。  
 当たり前だ。

それこそ、こっちの話、で、俺の話、だ。

とりあえず舞台設定の説明から、話を進めよう……自分の周りを  
 『舞台』とか『設定』とか言うのも、どうかとも思うが。

あひるがおか  
 家鴨ヶ丘町、というのが俺の住む町の名前。都心部からそこそこ  
 離れた、そこそこの田舎町だ。しかし田舎と言ってもあくまでそこ  
 そこだ、それほど田舎ではない。住人として、そこだけは譲れな  
 い。

そしてその家鴨ヶ丘町の端の方にあるのが俺たちの通う、11年次の独楽原  
 高校だ。全国模試では常に上位を独占、各種スポーツでも華々しい  
 成績。なんてことは天地逆転しようとしてありえない。逆に、全国模  
 試なんて受けるわけがない、喧嘩上等日常茶飯事。なんてことも  
 天変地異があってもありえない、普通の高校。ただの普通の高校だ。

そしてその制服である、白い半袖シャツに灰色のズボン（冬季はさらに紺のブレザーに赤いネクタイで、むしろ意外とも言えるほど普通）を身に纏っている俺は今、レンタルビデオ店にいる。

いや、それだけでは正確ではない。

正確には、レンタルビデオ店の一番奥のカーテンの前だ。

.....

..... 変な誤解をしてほしくはないので、一応弁明しておこう。

決して取り乱した上での言い訳ではない。至って俺は冷静沈着である。

「今日の帰り、付き合ってくれないかい？」

学校でそう明日木に誘われた。

誘われたから、付いて来たただけだ。

ともすれば浮気の言い訳にも聞こえるが、もちろん浮気でもなければ、言い訳でもない。至って俺はクール&ドライである。

その証拠に、一歩たりとも中には入っていない。

「それじゃあ、大人の階段を三段跳びで駆け上がってくるよ」

と、カーテンをくぐる明日木の背中に、どうか踏み外しますように、と神に祈っただけである。

決してその瞬間、その隙間から中を覗いたわけではない。

ちなみに実にどうでもいいことだが、明日木は少し前に誕生日を迎え、十八になった。ついに彼の変態歴も十九年目に入ったということだ。

実にどうでもいいことだ。

..... いや、意外と重要なことなのかもしれない。

自分の友人が変態だということは、もしかしたら自分も同類だと周りに思われている可能性がある。

これは由々しき事態だ。

早めに手を打っておこう。

葛平七生は、変態ではない。

普通。一般。平凡。

ノーマル。ポピュラー。アベレージ。  
そんな男である。俺は。

……。  
……説明すればするほど、言い訳に聞こえるのは  
いや、言  
い訳にしか聞こえないのは、俺だけだろうか？

そんな感じで紆余曲折、俺はレンタルビデオ店の外にいた。  
携帯電話の表示を見る。

七月五日の金曜日、午後四時六分。

明日木が大人の階段を上り始めて十分程経過していた。

映画は基本的に地上波でしか見ないし（ちなみにこの町に映画館  
はない）、第一、我が家にはDVDプレイヤーがない。

ブルーレイって何だ？

レンタルビデオ店からいつの間にもビデオは迫害されたんだ？

矛盾してないか？

と、いった感じで店内をとりあえず一周して、外に出た。

日毎暑くなる日々だが、まだそこまで暑くはない。むしろ店内の  
冷房は効き過ぎていて寒いくらいで、だから俺は外で明日木を待つ  
ことにした。

……別に置いて帰ってもいいけど。

暇潰しに携帯電話を取り出してみたけど、今ひとつ暇は潰せそう  
にない。メールする相手もないし、ゲームとかも出来ない。元よ  
り携帯電話自体、使いこなせていない。機械は苦手だ。父も母も機  
械音痴だ。我が家の家電は全て妹任せだ。

……妹、か。

……サジタリウスのこと、メールでそれとなく訊いてみるか？

そう思い立って、アドレス帳を開いたときだった。

雛村美月ひなむらみづきを見かけたのは。



雛村美月を一言で言うなれば、人気者だ。二言で言うなれば、クラスの人気者だ。特別勉強ができるわけではなく、特別運動ができるわけでもない。明るくて、明るくて、明るい女の子だ。クラスの女子の最大グループの中心的存在（何故女子はグループを形成するのか甚だ疑問だが）で、別にだからといって、他の女子グループと対立しているわけでもない。みたいだ。まあ、女子は裏の顔があるので『みたい』としか言えないけど。しかし、彼女のおかげで我がクラスが仲良しクラスとなっているのは、間違いないだろう。明日木以外に友人のいないこの俺ですら、クラスのイベントに巻き込まれるのだから、その手腕たるや見事なものだ。時々、委員長だったかと思えばどのリーダーシップだが、それは決してありえない。行動は起こすが、責任は取らない。それが雛村美月という人間だ。クラスの輪から三步離れた俺でも、そう言い切れる。だけど、それでもなお彼女の周りに人が集まるのは、その天賦の明るさのおかげなんだろう、と思う。

そんな雛村を、レンタルビデオ店の近くで見かけた。

もちろん学校は既に終わっている（今日はテストだったので早く終わった）し、この場所が学校から特別離れているわけでもないから、見かけても別段不思議ではない。

だけど俺は不思議に　いや、不自然に思った。

雛村の現在地でなく、目的地に。

旧開発地区。

それが今のその名称だ。

この国の景気が馬鹿みたいに良かったときの残骸。

馬鹿騒ぎの、後の祭りの、祭りの跡。

……まあ、俺の生まれる前の話だから、よく知らないけど。だけど、とりあえず知っていることが三つある。

一つ目は、旧開発地区に人は住んでいないということ。

二つ目は、その向こうには山があるだけだということ。

そして三つ目は、ろくでもない奴らの溜まり場になっているという噂。

つまりは、おおよその人間が、それぞれ、普通の高校、の学生が行くような場所ではないということだ。

しかし、明らかに雛村はそこに向かっていた。そして既に俺は、彼女の姿を見失っている。路地を曲がり、旧開発地区の建造物群の影に入ってしまったようだ。

……。

……とても、嫌な予感がする。

既視感にも似た感覚が。

そうだ。

こんな光景を　俺は、見たことがある。

その結末を　俺は、知っている。

知るべきではない、知らなければ良かっただけの話を　俺は、知っている。

気付いたときには俺は、踏み出していた。

歩き出していた。

走り出していた。

駆け出していた。

携帯電話片手に車道に、飛び出していた。

その瞬間、俺は車にはねられ、そして記憶を失った　なんて韓流ドラマよろしくの展開はここでは起こらない。前に説明した通り、ここはそこそこの田舎だ。こんな町の外れを走る車など、そうそうない。

俺は勢いのままに雛村と同じ道で、旧開発地区に踏み込んだ。

知ってもいたし、見てもいたが、入ったのは初めてだ。当然、土地勘はない。

とりあえず道なりに、走れるだけ走った。

走って、走って、走って。

走って、歩いて。

……疲れた。

「……くそつ。どこ行ったんだ」

俺は手を膝に置いて、かがみこんだ。

一度呼吸を整える必要がある。最近の運動不足が原因なのは明らかだ。

旧開発地区。

俺はその認識を一つだけ間違っていたようだ。

人が住んでいない場所なのではない。

人が住めるような場所ではないのだ。

そのコンクリート建造物群には、窓と呼べる穴はあっても窓枠すらなく、壁と呼ぶべきそれらが崩れ落ちているものもある。

ここにあるのは瓦礫と鉄骨と、ゴミだけだった。

煙草の吸殻、空き缶、コンビニのパンの包装。ろくでもない奴らの溜まり場、というのは本当みたいだ。

とりあえず呼吸を整え、さらに状況も整えたところで俺は再び走り出した。いや、走り出そうとした。

次の瞬間、廃墟と呼ぶにふさわしい建物の影から出てきた人間に、俺はぶつかった。

不幸中の幸い、加速する前だったので、三步よろめいて後退するだけで済んだ。

「いやあ、ゴメンゴメン。余所見していてね。大丈夫かい？」

相手は雛村。ではなかった。

甚平にサンダルの、決してお世辞にも青年とは言えないような、男性だった。

「案外、失礼だね、君。僕の心はまだまだ若いよ」

……そういう発言自体が、もう若くないと思う。

「と、言う僕も失礼だったね。自己紹介がまだだった……」

はい、と言つて彼は白い紙切れを片手で差し出した。受け取つて初めて、それが名刺だと俺は分かった。

……名刺つて両手で渡すものじゃなかったか？

『女郎花古書店 店主 女郎花涼庵』。

と、そこには書いてあった。

……じよろうばな？

「ああ、ゴメンゴメン。読みにくいよね、僕の名前。それで『おみなえし』『りょうあん』つて読むんだ」

俺の表情を察してか、それともいつも誰に対してもそうしているのか、彼は説明した。

「……俺は、葛平です。植物の葛に、平たいに、七つ生きる、で葛平七生です」

あいにく、学生である俺は名刺を持つていない。だけど、名乗られて名乗り返さないほど、礼儀作法を知らない人間でもない。やっぱり名刺は両手で渡すものだ、と思ひ出せるくらいの高校生だ。

「そうか。葛平七生くんか。君は『葛』か。奇遇だね。いや、偶然かな。それとも、必然かな」

うんうん、と頷きながら、とても普通のトーンで女郎花さんは独り言を言った。

……うわ。変な人にぶつかったかも。

そう後悔して、なるべく関わらないようにと思ひ、とりあえず必要なことだけ訊いた。

「あの。女郎花さん。この辺りで女の子、見ませんでしたか？ 俺と同じ独楽原高校の」

「大丈夫、大丈夫。その子なら見たよ。なんたつて僕の余所見の原因はその子なんだからね」

質問を、彼は最後まで聞かなかつた。両手を開いて、まるで愚問のように、俺の言葉を止めた。そして、

「だって、パンツ見えそうになりながら走っていったから」と、蛇足で愚かな言葉を続けた。

……うわ、最低な人にぶつかったかも。

「そのの。その建物の中に入っていったよ」

彼が指差したのは、彼が来た道の二つ前の建物もどき。俺にとっ  
ては二つ先の建物もどきだった。

「ありがとうございます。女郎花さん」

一礼して、駆け出そうとした俺を、

「ああ。そうだ」

と、彼は止めた。

「足元に気を付けてね」

確かに、そこかしこに瓦礫やら鉄骨やらの危険物が転がっている。

「はい。ありがとうございます！」

……前言撤回、結構いい人かも。

そして、それから一歩二歩進んだ俺を、

「ああ。それと」

と、止めた。

なかなか加速を許してくれない人だ。

「雛村くんにも、よろしくね」

「はい！」

そして、ようやく俺は加速を許された。

そして、ようやく俺が目的の建物もどきの前に着いたときには、

彼の姿はなかった。

手に持った名刺をもう一度見る。店の住所は、この町の商店街の  
中みたいだ。

今度、改めてお礼に行こう。

そう心に決め、名刺をズボンのポケットに入れて、窓枠も扉も存  
在しない建物もどきの中に踏み入れたときだった。

まさしく、そのときだった。

盛大に、豪快に、いっそ悲惨に、俺の足元が崩れ落ちたのは。

どつちら、アユミン（やっぱり現美みたいだ）の予言はよく  
当たるみたいだ。

「ほえ？ こんなところで何してるの？ 葛平くん」

それが雛村の第一声だった。

こんなところ、はお互い様だろ、と思ったが、何してる、に關しては自分でもよく分かっていなかったたので、俺は言葉を飲み込んだ。そして出た言葉が、

「……ちよつとしたアクシデントだ」

……。

……何、その、映画みたいな台詞。

……言ってから三秒後に恥ずかしい。

「ふうん。アクシデントかあ」

そんな俺の恥ずかしさなど一切関係なく、雛村は納得したみたいだ。

……いや。クラスメイトが降ってきて、アクシデントで納得するものだろうかと思うぞ。

「とりあえず、大丈夫？ 立てる？」

とりあえず、俺も状況整理しよう。

もはや状況整理は得意技だ。

そうだ。後で特技に追加しておこう。

俺は雛村が入ったという建物に一步入った瞬間に、落ちた。

もちろん床がなくて、ついうっかりというわけではない。

俺にドジっ子要素はない。

床は確かにあった。そしてその床が崩れ落ちたのだ。

そして飛行や滞空のスキルのない俺は、重力に丁寧に従って、床と仲良く一緒に落ちた。

で、今の状況だ。

おそらく先ほどまで床であったらろう瓦礫の上に、仰向けに倒れて

いる状況。

雛村が直立のまま、俺の顔を覗き込んでいる状況。

制服姿の雛村を、その足元から俺が見上げている状況。

……………。

……………いいこと教えてやる。今どきの女子は常時スパッツ着用だ、  
女郎花。

女郎花涼庵が『女郎花さん』からランクダウンした、記念すべき瞬間だった。

「何が『足元に気を付けて』だよ。あの野郎」

「ほえ？ あのやろう？ 何の話？」

「いや、こつちの話。ただの独り言」

俺は立ち上がり（いつまでもクラスメイトのスカートの中を覗くような人間ではない）、制服のほこりを払う。ズボンは大したことないが、さすがに白のシャツは汚れが目立つ。

最終的には、得体の知れない黒いラインが、いくつかシャツに残ってしまった。

……………絶対、母さんに怒られる。

若干帰りたくないなあ、と思いつながら身体をその場で少し動かしてみる。

指と手首と足首、腕と肩、首と背、腰と膝。

とりあえず痛みを感じるところはなし。むしろ、かすり傷一つないことにびっくりだ。

上を見上げると、見事に天井がない　いや、さっきまで床だったんだが。

高さは三メートル強ってところだろう。実際、普通は怪我する高さだろ、これ。

……………もしかして俺も妹と同じくサイヤ人なんだろうか？

「本当に大丈夫そうだね」

うん、と頷いて、

「それじゃ、気を付けて帰ってね」

バイバイ、と背を向けて立ち去る雛村。

「あっ、おい。ちょっと待てよ」

条件反射のように声を掛けた。

それに応じて雛村は立ち止まり、振り返った。

「ほえ？ 何？ 葛平くん」

きよとん、と何故呼び止められたのか分からない顔だ。

「ああ。出口ならその階段だよ。落ちてきた建物とつながってるよ」

ビシッ、とすぐ近くの階段を指差す。

「あ、いや……そうじゃなくて……」

……しまった。

声を掛けてから後悔する。話す内容を決めてないことに。

「あ、ああ。床、なくなっちゃってるんだもんね。そっかあ、困ったねえ……」

ポン、と手を叩いた後、うーん、と唇を尖らせた表情を作る。

なんだか一挙一動が漫画やアニメのキャラみたいだ。

「いや、そういうことでもなくて」

「私も、その階段しか出口知らないしなあ……」

「いや、だから」

「でも、崩れてない端の方なら、なんとか行けそうじゃない？」

「あの」

「うん。行けるよ、葛平くんなら！」

「そ」

「葛平くんファイト！」

「」

「フレー、フレー、葛平くん！」

「」

……なんだろう。全然噛み合わない。

というか、会話ができない。話にならない。

あまりに一方的なマシンガントークだ。



「この辺り、あんまり治安良くないみたいだからさ。早く出た方がいいぞ」

ここでようやく、俺は目的を果たす。

できれば無理にでも連れ出したいが、なにぶん根拠がない。

ただの、俺の勘。

ただの、俺の直感。

ただの、悪い予感。

だけ。

だけど、俺はもう既に、この話に首を突っ込んでいる。

首どころか身体ごと、床を突き破っている。

……面倒だから、やっぱり無理にでも連れ出すか？

そう思って、俺は雛村に手を差し出した。

「ほら。一緒に出ようぜ」

その手を、雛村が取ることはなかった。

その手に、触れられることを避けた。

ただ、さらに小さく縮こまって、その身を後ろに引いていた。

……。

……いや。確かに、いかにも温厚そうな人間じゃないけどさ、クラスメイトにそこまで露骨に拒否されたら、さすがの俺でも傷つくわ。

「……駄目」

若干凹んでいた俺に、その声が届いた。

ともすれば、そよ風にかき消されてしまいそうな声が。

「……私は、捜さなくちゃ」

うつむき加減の雛村の口が動いている。

当たり前だ。雛村がしゃべっているのだから。

だけど、それを俺は理解しかねている。

このか細い声が、いつもいつでも明るくて、明るくて、明るい彼女と、一致しない。

天賦の明るさに満ち満ちている雛村美月という人間と、合致しな

い。

「捜さなくちゃいけないの。沙雪<sup>さゆき</sup>を」

……………。

このとき今日初めて、雛村と目が合った。

その瞳を、真正面から見た。

……俺はまたもや前言撤回しなくてはならない。

雛村美月は、漫画やアニメのキャラではない。

確固たる意志を有した一人の、人間、だ。

なんてことを言ったら、漫画やアニメのキャラに失礼だろうか？

「それにしても、何なんだろうね？　ここ」

トコトコ、と足音を立てながら雛村は話しかけてきた。

やっぱりこいつ、何かのキャラなんじゃないだろうか？

そう思ったが、その思考はすぐに止めた。

なんとなく本末転倒、矛盾の無限ループに入ってしまったいそうな気がした。

「確かに。電気は点いているけど、現在使用中って感じはしないな」  
六人は並んで歩けそうな、だけでも無人の通路　いや、俺たちがいるから無人ではないけど。

天井に等間隔で取り付けられた蛍光灯のおかげで暗くは、ない。  
だけど、途中途中には死んだものや、瀕死のものがあり、その辺りはどうしても薄暗くなってしまふ。

複雑に入り組んだ通路に、もちろん窓は一つもない。ここは地下だ。

これで停電でもしたら、なかなかスリリングなイベントだ。

これでゾンビでも出てきたら、かなりショッキングなゲームだ。

……やば。変なこと考えてしまった。

忘れよう。忘れよう。

胸を張って、声を大にして、はっきり言って、俺はホラー系が苦手だ。

だって、ほら。

怖いじゃん。

素直に。

妹は笑いながらホラー映画とか見るけど。あれは、俺にはとても真似できない奇行だ。

……なんか今日は妹の話ばかりだな。

もしかして本当に、俺は妹独占主義なんだろうか？

ロリコンではないにしても、シスコンなんだろうか？

明日木ではないが、確かに最近の妹は急成長期だ　胸とかが

色気は、ないに等しいけど。

それでも魔の手が迫っている。

許すまじ、サジタリウス。

ついでに許すまじ、女郎花。

「なんか、ゾンビでも出そうな雰囲気だね」

……………。

……………　せつかく忘れ始めたのに。

忘れよう。忘れよう。

怖くない。怖くない。

「たとえば、その横の道から……………　うわっ！」

「ひおっつー！」

「　とか、ね」

……………　口から心臓が飛び出そうだった。　というか少しこぼれたんじゃないか？

「あはははは。葛平くんって案外ビビリなんだね」

……………　この女、俺のガラスハートを叩き割るつもりか。

よし、無視しよう。

怖くない。怖くない。

こわくない。こわくない。

人って字を書いて飲み込めばいいんだっけ？

あれ？　ひとつでどんな漢字だっけ？

どんな感じだっけ？

……………。

……………　とりあえずは、別のことを考えよう。

そうだ。さっきのことを思い出そう。

そうだ。これは現実逃避じゃない。

場面回想だ。

こわくない。コワクナイ。

「さゆき？ 佐々良ささのことか？」

雛村の言葉に聞き覚えはあった。いくら俺でもそのくらいは覚えていた。

佐々良沙雪。クラスメイトの名前だ。

会話したことはまず間違いなく、ない。もちろん、人付き合いが苦手で無口な俺自身も原因だが、それ以上に佐々良は無口だ。ただし、俺みたいな無愛想な無口ではない。極度の人見知りで、極度の恥ずかしがりのため、極度の無口だ。そういう人のことを、生まれてからの小鹿のように、と言うみたのだが、佐々良の場合は、生まれる前の小鹿のように、だ。同じクラスにしながら、その声を聞くことは滅多にない。かろうじて聞けるのも、授業中のみだ。いつも雛村と一緒にいて、いつも雛村が佐々良の言葉を代弁している。そんな光景を見て、雛村はスピーカーみたいだな、と思ったことがある。だけど、そのくらいだ。佐々良について知っていることは。雛村とは対照的に目立つタイプ（ある意味で目立つが）ではないので、クラスの前から三歩離れている俺は、そのくらいしか知らない。

「そういえば、今日休みだったな。佐々良」

テスト最終日に可哀想に、と思った記憶がある。まあ。今日のこただから、忘れていたら自分の記憶力を疑うが。

もう一つ追加情報だが、佐々良は見るからに病弱で、その見たまま病弱だ。

病欠もよくあるし、貧血で倒れたところも何度か見たことがある。

「そ、そうなの！ 沙雪、今日も休みでさ」

途端、雛村の口調も表情も、変わった。

変わった、というよりは、元に戻った。キャラに戻った、という感じだった。

「それでね。実は私、登校バスに乗ってるときに、この辺で沙雪を

見かけたの。そして、学校行ってみたら、休みだったから。もしかしたら、また貧血で倒れてるんじゃないかなあ、って思ってた」

「それで捜してるのか……でも、家で休んでるんじゃないのか？」

「……家には、いなかった」

それでね、と続けた。

「この辺で捜してたら、親切な甚平のおじさん　じゃなくてお兄さんが、ここに入っていったよ、って教えてくれたの」

「……ほう。その『お兄さん』は親切だったな」

あの野郎、雛村にも若さアピールしてやがったのか。

「うん。親切だったよ。この床が崩れそうだから、端の方を通りなさいっても教えてくれたし」

「ほう。それはそれは、親切だなあ」

よし。近いうちに、絶対にお礼に行こう。

「で、いざ出発、と思ったら、葛平くんが落ちてきたってわけ」

「ああ。俺はあいにく『親切なお兄さん』には会えなかったからな。残念だよ。本当に残念だ」

「？　残念、だったねえ」

俺の言葉に疑問を感じた雛村だったが、とりあえず頷いた。

でもまあ、ここであれこれ残念がついても仕方ない。

想いの丈は、お礼、で返させてもらおう。

「よし。それじゃあ、捜しに行くか」

俺はようやくやく瓦礫の上から降りる。そしてそのまま、雛村の方へと歩み寄る。

「ほえ？　捜しに、って？」

「佐々良を、だよ」

ここで雛村の横を通る。

「いや！　大丈夫だよ！　私一人で全然、問題ないから！」

ブンブン、と首も手も振って、またも拒否する。先ほどのレベルではないが、なかなか強く拒否されている。

だけど、もう凹んだりはしない。俺のアイアンハートは強いのだ。

「あつそ。それじゃあ、俺は勝手に付いていくだけだから、気にしないでくれ」

もう既に俺は、雛村に背を向けて立ち止まっている。

なんとなく、彼女の瞳を見たら、その意志に負けそうな気がした。

「大丈夫、大丈夫！ 本当に、私の方こそ気にしないで！」

「悪い、雛村。俺はこんなところにクラスの女子を置いていけるほど、薄情な人間でもないし。大丈夫、って言われて、はいそうですか、って引き下がるような、謙虚な人間でもないんだ」

雛村の拒否の言葉は、もうない。

「だから悪い。俺の自己満足に付き合ってくれないか？」

今、映画みたいな台詞を、恥ずかしげもなく、俺は言えているだろうか？

「なんだか本当に、ゲームみたいなところだね」

トコトコ、と俺の歩幅に合うように、雛村は歩数を稼いで歩いていた。

確かに、身長差が結構あるので、俺もゆっくり歩いているつもりなんだが……もう少しスピード、落とすか？

「俺には、お前自身がゲームキャラに見えるよ」  
相変わらずの、無人の通路。

俺たちの話し声と、足音しか聞こえない。

通路は複雑に入り組んでいるため、さっきから同じ場所を何度か通った、ような気がする。同じような景色が延々と続くので、些細な違いで判断するしかないのだが。

そして、さっきから一方的ではないにしても、雛村が話しかけてくれている。

決して話し上手ではないし、あまり聞き上手な俺ではないが、それでもこの静かな通路で二人無言、というのはさすがにきつい。

その点では、雛村の他愛もない話はとてもありがたい。

「やだあ。そんなに褒めないでよ、葛平くん。私に美少女バトルヒロインは、まだ早いよ」

……いや、褒めたつもりもないし。美少女バトルヒロインとも思っていないし。

「でも確かに、この冒険の主人公は間違いなく、私だね」

あつさり主人公の座も奪われたし。

「でもって葛平くんの役どころは」

雛村が、俺の配役を思案する。

まあ、格闘家、つてのが妥当だな。間違っても、魔法使い、つてタイプじゃない。

だけど、主人公より、その仲間たちの方が人気になることは、よくあることだ。

残念だったな、雛村。

……あれ？ なんだか自虐になってないか？

「『村人C』つてどこ、かな」

「AもBもないのに、いきなりCかよ」

俺は一生、同じ台詞しか話せないのか？

「ほえ？ AもBもしてないのに、いきなりC だなんて、葛平くん大胆」

「少し聞き違えただけで、大変なことになった！」

大きな声で、突っ込んだ。

サジタリウス事変以来の突っ込みだ。

ていうか、ついうっかり、明日木相手と同じノリで突っ込んでしまった。

雛村を見る。

目がまんまるになっている。どんぐり眼というやつだ。

……あー。またビビらせてしまったな、これ。

だけど雛村は、俺の予想とは全く違う反応をした。

「はは……あはははは」

笑った。

「はははははははは」

笑っている。

「はははははははは」

涙を浮かべながら、笑っている。

「はは……ひい、ひい、ひい」

腹を抱えて、呼吸困難になっている

……いくらなんでも、笑いすぎだ。

「ああ、ごめんね。突然笑って」

涙を拭いながら、雛村はようやく落ち着きを取り戻し始める。

「葛平くんって意外と突っ込みキャラだったんだね。もっと無愛想キャラだと思ってた」

「べ、別に突っ込みキャラとかじゃねえよ」

失敗した。

俺の、無愛想オーラで人を近寄せない作戦、は成功していたみたいなのに。

「うん。これは私のポケとしての才能が試されるね」

「変な期待するな。さっきのは、その、なんとなくノリで言ってみただけだ」

まだ修正はできる。なんとか無愛想キャラに戻さなくては。

ポケは明日木だけでお腹一杯、手一杯だ。

「てつきり、明日木くんが『攻め』で、葛平くんが『受け』だと思っただよ」

「誤解を生む言い方をするんじゃない！」

「あ、ごめん。逆だった？」

「そういうことじゃない！ 『突っ込み』と『ポケ』と言えっただよ！」

「ああ。『突っ込む』側と『突っ込まれる』側ってこと？」

「より際どい言い方をするな！ この話に年齢制限掛かるだろ！」

「もう、葛平くん注文多い」

それに、と続ける。

「私は別に変なこと言っていないよ。葛平くんにはどんな風に聞こえるか知らないけど」

「う……」

言葉に詰まる俺。

「ここで正論を振りかざすのか、この女。」

「葛平くんと明日木くんが　　だってことは、とっくにみんな知ってるよ」

「　　には『ともだち』の四文字以外、入る余地が一切ないな！」

「葛平くん強引。それは読者の方の自由でしょ？」

「それは、その通り。大丈夫だ。俺は読者の皆様が聡明な方々だと信じている」

むしろ、祈っている。

本日二度目の、神への祈りだ。

いつの間にか俺は、熱心な信奉者になっていたみたいだ。

「あはは」

雛村が笑った。

さっきの馬鹿笑いではなく、楽しそうに笑った。

「こんな会話、男の子とするなんて思ってもみなかった」  
笑顔のまま、そう言った。

「ん？ クラスのやつらと、してるんじゃないのか？」

雛村がクラスの男子と仲良く話をしているのは、日常的な風景だ。

「しないよ、こんな話。普通の男の子には」

「その文脈だと、俺が普通じゃないみたいだな」

「十分普通じゃないよ、葛平くんは」

「そうか？　普通を自負して生きているつもりなんだけどな」

「普通の男の子はクラスメイトだからって、こんな得体の知れない所に付いては来ないよ」

「そうか？」

「普通の男の子はクラスメイトの美少女だからって、こんな得体の  
知れない所に付いては来ないよ」

……わざわざ言い直すほどのことか？ それ。

「だけど、勘違い、しないでね」

気付くと、笑顔は消えていた。

「ちよつと優しくされたからって、心も身体も開くような女じゃな  
いから」

「……別に、そんなつもりはねえよ」

なんだ？ 警戒されているのか？ 俺。

「ちよつと優しくされたからって、心も身体も開くような美少女じ  
やないから」

なんだ？ さっきのところは、ちゃんと突っ込むべきだったのか  
？ 俺。

「勇者美月の装備はスタンガンだから」

「ずいぶんと近代的な勇者だな」

なんだ。やつぱりボケだったのか。

「それに私、彼氏いるから」

「へえ。クラスのやつか？」

まあ、雛村なら一人や二人、いない方がおかしい。だてに、美少  
女と連呼しているわけじゃない。

ドラゴンボールを集めなくても、神龍に頼まなくても、彼氏くら  
いできるだろう。

「ううん。相原先生」

「あのナルシストメガネ（悪口）の！？」

「実は、保健室の先生」

「女性になっちゃったけど！？」

「本当は、校長先生」

「完全なるおじいちゃんですけど！？」

「ごめん。嘘」

「どれが？ どこが？ どこまでが！？」

「どうやら俺は、根っからの突っ込みキャラみたいだ。」

「女の嘘くらい見抜けないと、これから先、生きていけないぞ」

「……なかなか過酷な生存競争だな」

「気付いたら消えていた雛村の笑顔が、気付いたら戻っていた。」

「弱肉強食の世界は厳しいからね。次の瞬間、葛平くんは私に、唇も身体も何もかも奪われても、文句は言えないんだからね」

「さっきと言ってること、まるっきり逆になってるぞ」

「ほえ？ そうだったけ？ 忘れちゃった」

「五百九十五文字前から読み返して、しっかり思い出しとけ」

「ええー。面倒くさい」

「……この女。小説の良さを否定しやがった。」

「あ！ とか言っていると、勇者美月は下へと続く階段を見つけた」  
確かにそこには、下へと続く階段があった。

「……いや、待て。小説の良さを蔑ろにしたまま、話を先に進めるんじゃねえ！」

地下二階も、構造自体は前のフロアと大差はなかった。ただ圧倒的に違うのは、明るさだ。

この明かりは、左右の壁の足元にあり、その生存数も格段に少ない。

かろうじて見える、という程度の照明だ。

もちろん、ここにも窓はないし。当たり前だが、日の光は届かない。

「なんか、一気に暗くなっちゃったね」

「そうだな。足元、気を付けて歩けよ」

不覚にも、女郎花と同じ言葉を言ってしまった。

「ふふーん。葛平くん優しい」

なんとなく、語感が嬉しそうだ。

「別に。普通だろ」

「だから、葛平くんは普通じゃないって。異常、っていうか、変態？」

「……俺は女子に優しくただけで、変態扱いされるのか」

俺は、明日木と同じレベルまで墮ちたのか。

やっぱりもっと早くに、友人が変態である危険に気付くべきだったのか。

「ああ、でも。いい意味で、だから。なんていうか、こう、変態紳士、って感じ？」

「より変態レベルが上がった気がするんだが」

というか、変態自体に『いい意味』があるとは思えない。

「でも、レベルは上げといた方がいいと思うよ。このダンジョンで生き延びるためには」

いつの間、この地下道はダンジョンになったんだ？

「何のスキルもない、村人Cとしては」

「頼むから、せめて格闘家にジョブチェンジさせてくれ」

変態紳士の村人Cなんて可哀想すぎる。俺が。

一体、どんな変態な台詞を一生言わなければいけないんだ。

何の罰だよ。

前世で俺は何かしでかしたのか？

「まあ、そこまで頼むなら、してもいいけど。でも、レベル1からだよ？」

「ああ、構わない。俺には基礎経験値があるから」

「だけど、今ゾンビに襲われたら一撃だよ？」

……お前はゾンビの話、本当に好きだなあ。

ただでさえ俺は、ますます暗くなってビビっているのに。

「まあ、このダンジョンにゾンビがいる確率は、半分くらいだけど」

「半分の確率でいるの!？」

無駄に大きく突っ込む。

気を強く持ったためだ。

「まあ、ゾンビの話は置いて」

置いとくなよ。取りに戻れよ。俺のMPに大きく関わるわ。

「『人喰い鬼』って話、知ってる？」

……ゾンビに続いて、鬼かよ。

この女は、俺のガラスハートを叩き割った上に、さらに踏み潰したいようだ。

「『幽霊病院』と同じ都市伝説なんだけどね。ああ、幽霊病院、っ

て知ってるよね？」

「……隣の日之輪市ひのわの廃病院だろ？」

……俺、この話に参加しなきゃ駄目だろうか？

ゾンビに、鬼に、幽霊。

どんなコンボ技だよ。

踏み潰した上に、さらに爆破するのか？

前世で俺は、雛村に何をしでかしゃがったんだ。

……ああ、前世からやり直したい。

「そうそう。その幽霊病院と同じく、今この町で流行ってる都市伝説が『人喰い鬼』」

やっとこの町も都市化してきたよね、と雛村は誇らしげに言った。

「そんなことで都市化してほしくねえ」

それなら田舎のままがいい。

それなら田舎のままがいい。

……ていうか、そんな話を流行らせたやつ、誰だよ？

見つけたら、格闘家スキルでボッコボコにしてやる。

「なんでも、人を攫って巢に持ち帰って、引き千切って食べるだつて」

……想像してない。断じて俺は想像していない。

「実に、非現実的な話だな。この二十一世紀の日本に、鬼、なんているわけがないだろう？」

少し声が裏返った気が、しないてもない。

「そう、だよな。非現実的だよな。鬼なんているわけないよね」

あはは、変な話してごめんね。

雛村は、そう笑った。

……。

……。

……あれ？

人を攫う、つてもしかして、佐々良が？

佐々良が、攫われて、巢に持ち帰られて、そして……。

「あのさ、雛村」

そう、声を掛けたときだった。

その音が聞こえたのは。

こつーん。

こつーん。こつーん。

こつーん。こつーん。こつーん。

。

それは、足音だった。

同じリズムを刻む、誰かの歩く音。

無人の　俺たち二人しかないはずの通路に響く、俺たちのではない音。

だって、俺たちは立ち止まっている。

だって、俺たちは一言も発していない。

深い闇の中から響く、足音。

その姿は、見えない。

だけど、それは確実にこちらに向かっている。

それだけは、分かる。

一番高い可能性は、佐々良だ。

俺たちの捜していた佐々良が、こちらに向かっていることだ。

この冒険の、この上ないハッピーエンドだ。だけど。

だけど、その可能性を俺の何かが否定する。

これが、本能、ってやつだろうか？

そんなことを考えている間も、足音は止まらない。

そして、その足が、足元の照明の範囲に入る。

スニーカーだ。

サイズの、明らかに男。

この上ないハッピーエンド、の可能性はないようだ。

もう一步、彼は踏み出す。

その全身が、照らし出される。

英字プリントのTシャツに、ダメージジーンズ。

それと、右手に金棒ならぬ金属バット。

それに、プラスチックの赤い鬼のお面。

ずいぶんと近代的な鬼、だな。

そんな冗談は、冗談でも言わない。

そんな冗談は、冗談でも言えない。

だって彼は、こちらを見て、立ち止まっているから。  
冗談の通じそうな彼では、ないから。

「雛村」

横にいる彼女に、声を掛けた。

視線は彼から、外さずに。

「何？ 葛平くん」

雛村も、視線を外さずに答えた。

横を見ていないから、正確ではないが、そんな気がした。

「喧嘩で負けない方法、って知ってるか？」

雛村は答えない。

別に俺も、答えを待ってもいない。

「それはな」

位置について。

「相手と」

よーい。

「喧嘩しない、ってこと！」

どん。

格闘家は、勇者の手を強く握って、逃げ出した。

敵前逃亡も、いいところだ。

「うおおおおおおおおおおおおおお！！！」

「きゃああああああああああ！！！」

走る。

走る。

走る。

葛平七生は走る。

走る。

走る。

走る。

雛村美月も走る。

走る。

追う。

迫る。

人喰い鬼も走る。

その距離は、徐々に、縮まる。

その距離は、確実に、縮まる。

「くそっ！ 俺の背中に乗れ、雛村！」

背の小さい雛村の速度は、遅い。

その手を握っている俺も、全速では走れない。

ならば、どうする？

答えは、雛村を背負う。

それなら、全速は無理でも、全力では走れる。

「よしっ！ 私は背中に乗るよ、葛平くん！」

速度を殺さず、俺は前かがみになる。

速度はそのまま、雛村は背中にしがみつく。

合体だ。

フュージョンだ。

だけど、パワーアップできないのが、残念極まらない。

走る。

走る。

走る。

雛村美月を乗せて、葛平七生が走る。

背中に当たるマシユマロ的な二つに、感覚を研ぎ澄まさせている暇は、残念極まらないが、ない。

俺は本当に、変態的にも、紳士なようだ。

ようやく。

ようやく、呼吸が落ち着いてきた。

体全体でしていた呼吸が、なんとか肺だけでできていた。

上で雛村を捜していたときよりは、長く走り続けられたけど、それでもやつぱりまだまだだ。

……これは、夏休み中に鍛え直さないとな。

そんなことを考えられるくらいには、頭も冷静になっている。

人喰い鬼。

あれが、そうなのか？

噂の、鬼、なのか？

ずいぶん都合よく出てくるものだ。

噂をすれば、ってやつか？

それにしたって、都合よすぎるだろ？

これが小説なら、あまりにもありふれた展開だ。

俺ならそんな小説、絶対に読まない。

たとえ、その作者に土下座されても、絶対に読まない。

こんな展開を書いた作者を、俺は絶対に許さない。

「ごめんね。葛平くん」

作者でもない雛村が、小さな声で、謝った。

「私のせいで、こんなことに巻き込んで」

もちろん、こんな展開を書いたことではなく、こんな展開になったことに。

「別に、雛村のせいじゃない。俺が勝手に首を突っ込んでいるだけだ」

もしくは、作者のせいだ。

「だから、気にするな」

俺も、小さな声で、答える。

自分の最小ボリュームで、話す。  
当たり前だ。

ここはまだ地下二階。人喰い鬼の巣の中だ。

雛村を背負ったまま俺は、このフロアを駆け巡った。

駆けて、角を曲がり、駆けて、曲がり。

駆けて、曲がり、曲がり、曲がり。

そして、暗がりに入り込んだ。

……ともすれば、暗がりにはクラスの女子を連れ込んだ野郎、だが。

そんなことを、雛村は騒がないし。

そんなことを、俺も目的としていない。

そんな場違いで、不謹慎な俺たちではない。

目的は、鬼を撒くこと。その視界から消えること。

その目的は一時的だが、成功している。

少し前に、鬼は横の道を通り、過ぎた。こちらに気付いた様子はなかった。

だから俺たちは、小声だが、会話している。

だけ。

冷静になつてきて、初めて気付く。

……出口、どっちだ？

一心不乱の無我夢中で逃げていたから、完全完璧に、来た道が分からない。

ただでさえ暗い上に、通路も似たり寄ったり。

まずい。

これは、まずい。

鬼に見つからないように、出口を探さないとならない。

……いよいよ本当に、ゲームみたいだな。

「ごめんね。葛平くん」

「……さっきも聞いた。雛村のせいじゃない、謝るな」

「ごめん。嘘……なの」

それも、彼氏の話のときに聞いた。

コピペで文字数を稼ぐのは、感心しないぞ。雛村。

……あれ？ コピペ、じゃない？

「嘘なの。本当は、沙雪……」

そこで、雛村は言葉に詰まる。

そして、カサカサ、と紙の音。

どこかから、何かを取り出しているみたいだ。

暗闇の中だから見えませんが、そんな気配がする。

「これ、見て」

俺の前に、それが、差し出される。

ノートくらい一枚の白い紙。

その真ん中の辺りに、黒い文字が書いてある。

それが、見える。

雛村が、自分の携帯電話の画面の明かりを利用して、見せてくれている。

もちろん、外に光が漏れないように、最大限の注意を払って。

そんなことは分かるのに、目の前の文字列の意味が理解できない。

もしかして、俺は百点満点の馬鹿なんだろうか？

文字が、頭に入っていない。

お母さん ごめんなさい

私はもう生きていません

七月四日 佐々良 沙雪

震える、細い文字。

だけど、確かに、そう書いてある。

これは、間違いなく。

これは、間違いなく、遺書だ。

それも、自殺、の。

……佐々良沙雪は。

……自殺している。

……。

マジかよ？

リアルかよ？

小説の話じゃないのかよ？

「だから」

その声は、泣きそうだ。

「だから、ごめんなさい。葛平くん」

謝るな。

なんて。

俺には、到底言えない。

その言葉は。

俺に向けられたもの、ではない気がする。

「でも」

その声は、泣いているようにも聞こえる。

「でも、私は沙雪をこの辺りで見たの」

それも、今朝、見たの。

「……………」

俺は、言葉を返せない。

今朝、だなんて。

そんなわけ、ないじゃないか。

今日は、七月五日だ。

よく覚えている。

だから。

そんなわけ、ないじゃないか。

だから。

「だから、私の方こそ、自己満足」

その声は、笑っているようにも聞こえる。

「……………」

……俺は、二百点満点の、馬鹿だ。

少し考えれば、分かるじゃないか？

『普通の男の子はクラスメイトだからって、こんな得体の知れない所に付いては来ないよ』

それは、雛村も同じじゃないか。

普通の女の子はクラスメイトだからって、こんな得体の知れない所を一緒に歩いたりはしない。

心細くて、どうしようもなく心細くて。

突然降ってきた、クラスの無愛想キャラに頼るしかなくて。

話し上手でも、聞き上手でもない相手に話し掛け続けて。

それは、大切な友達に話そうとしていた他愛もない話で。

努めて明るく振る舞って、気を強く持って。

たとえ、幽霊になっていたとして。

たとえ、ゾンビになっていたとして。

それでもなお、大切な友達を捜しに来た。

そんな『普通』ではない彼女に。

『異常』ともいえる雛村美月に。

何故、俺は気付けなかった？

俺が鍛え直すべきは、身体なんかでは、ない。

「葛平くん」

その声は、驚いているようにも聞こえる。

「うしろ！！」

この瞬間の俺は、三百点突破の、馬鹿だ。

そして金棒は、振り下ろされた。

勢いよく俺は、潜んでいた暗がりから飛び出た。  
それに続いて、鬼も飛び出てきた。

.....  
.....  
.....あと、一瞬。

いや、刹那。雛村の声が遅ければ。

俺の後頭部は、砂浜のスイカの気持ちを理解していただろう。  
それはもう、痛い、ほどに。

飛び出して、振り返り、立ち止まる。

鬼もそれに応じて、向かい合うかたちで、立ち止まる。

その右手には未だ、金属バット。

足元の明かりに照らされて。

二人、立ち止まる。

間合いは十分。

射程は、バットの分、鬼の方が長い。  
自然と、足が一步、後ろに下がる。

前にも言ったが、俺はビビりだ。

すると、鬼は一步、踏み出す。

だけどそれ以上は、動かない。

俺も、動かない。

「.....」  
.....  
.....時間が止まる。

多分、ほんの少しの間。  
だけど、とても長い間。

.....  
.....  
.....失敗した。

今日はとことん、失敗する日だ。

位置関係が、すこぶる悪い。

俺、鬼、雛村。

最悪の一直線だ。

雛村の姿は闇の中だが、確実に鬼の後ろに、いる。

この状況で雛村に標的を変えられたら、間違いなく、俺は間に合わない。

あの夏と同じく、俺は間に合わない。

.....

.....俺は、また、あれを繰り返すのか？

.....

せめて。

せめて、俺が狙いなら。

俺だけが狙いなら。

俺だけが狙われて.....いないか？

この状況は？

鬼の狙いは、確実に俺だ。

雛村は標的になっていない。

どうしてだ？

この暗闇で、雛村が見えていないのか？

.....いや、そんなわけはない。

さっきは二人とも追われたし、何より、直前に叫んだのは雛村だ。だけど、狙いは俺だ。

.....

それなら。

それなら、方法はある。

この『鬼ごっこ』に勝ち目は、ある。

「雛村！」

鬼の向こう側にいるだろう名前を呼ぶ。

今回も、返事は待たない。

「ちよっと、そこで隠れてろ」

そして、間髪入れずに、

「鬼さんこちら！ 手の鳴る方へ！」

ぱぁん、と俺は猫騙しのように手を打つ。

もちろん、猫騙しの通じるような距離ではないし。目眩ましの効果も期待もしていない。

むしろ、逆。

こちらへの注目と、挑発。

そして俺は、またも走る。

鬼と雛村がいる方向ではない。

そちらには背を向けて、走り出した。

続いて、鬼も走り出す。

鬼も、雛村がいる方向ではない。

俺の背を追うように。迫るように。

.....

よし。

やっぱり狙いは、俺だ。

それなら問題ない。作戦は成功だ。

とりあえずは、鬼を雛村から離す。

雛村に無駄な危害が加わらないように。

あの夏から、俺だって成長している。

これは敵前逃亡、ではない。

戦略的撤退。

戦略的、誘導。

だから、走る。

だけど、全速や、全力では走らない。

今回は、鬼を撒いてはいけない。その視界から消えてはならない。標的を変えられては、意味がない。

だから、走る。鬼との距離を保ちながら。

そして、思う。

この鬼の足は、速くない。

体力があるようにも、見えない。  
どおりで、雛村を背負った状態でも撒けたわけだ。  
ならば。

ならば、この『鬼ごっこ』に俺は勝てる。

俺は 勝つ。

そう、誓いを立て。

急減速をして、立ち止まる。

立ち止まり、振り返る。

振り返り、鬼を見る。

鬼も立ち止まっている。保っていた距離はそのままだ。

相変わらず、その表情はお面の下。

だけど、呼吸が多少荒い。

やっぱりこの鬼、体力はない。

だけど、持久戦にする気はない。

雛村が、待っている。

俺は足を前後に、膝を曲げ、少し腰を落とす。上体もやや前のめり。

明らか、特攻体勢を構える。

鬼もそれに応じて、両手で金属バットを構える。

それは、向かってくる球を打ち抜く構え、ではない。

それは、向かってくる人間を打ち下ろす構え、だ。

やっぱり、俺の目に狂いはない。

俺はそれで、勝利を確信する。

目の前の光景を見て、確信する。

鬼の構えは隙だらけ。いっそ、無防備と言ってもいい。

……。

……俺は一体、何をビビってたんだ？

まったくもって、自分自身に腹が立つ。

こいつは鬼のお面を着けた、金属バットを持った、ド素人だ。

ただの、普通の人間、じゃないか。

戻ったら、ビビリの汚名は雛村に返上しよう。

そして、鬼に金棒より俺の方が強い、と自慢してやるっ。

「なあ、あんた」

俺の声に恐怖や、迷いは、ない。

「喧嘩で負けない方法、って知ってるか？」

鬼は答えない。

というか、こいつの声を聞いたことがない。

実にどうでもいいことだが。

別に俺も、答えが返ってくるとは思ってもいないし。答えを待つ

てもいないし。

「それはな」

位置について。

「絶対に」

よーい。

「負けない、ってことー!!」

どん。

そして、俺はまたも、またも走る。

今度は、鬼に向かって。

なんだか今日は走りっぱなしだ。

青春ドラマの主人公みたいだ。

……似合わねえー。

甘酸っぱい話とか、俺、似合わねえ。

結局、俺らしいのはこういうバトルアクション系だ。

苦くて辛い話が、お似合いだ。

ほら。

ほら、あと三步で、苦くて辛い展開だ。

そう。

そう、あと二歩で、金属バットの射程範囲内だ。

さあ。

さあ、この一歩が、まさしく俺の勝利への第一歩だ。床への踏み込みの方法を変える。

それは走るための方法、ではない。

それは迫るための方法、だ。

全速で、全力な、足運び。

もとより俺は、マラソンランナーではないし、スプリンターでもない。

俺は、ファイターだ。

一歩で、一撃で、戦況を変える、格闘家だ。

鬼が金属バットを振り下ろす。

しかし、俺はそこにはいない。

俺の速度変化による幻影に攻撃したわけではない。

そんなのは、達人同士でできることだ。

俺も多少のフェイントくらいならできるが、そんなことはしない。理由は単純。

相手がド素人だから。

ド素人相手には案外、フェイントは効かない。

だから。

行動も単純。

相手の射程に入った途端、さらに加速して、横に避ける。

相手の左側に回り込んで、それと同時に身体を反転させ、背後を取る。

最短で、最速の、足運びで。

見事な空振りを見せた鬼も、ようやく俺を追って反転する

や、反転しようとする。

もう、遅い。

俺はもう、構え、終えている。

完全なる、俺の射程範囲内。

この距離は金属バットの射程ではない。

その武器は、長すぎる。接近戦に向いていない。俺の射程範囲内

では無意味だ。

そして、俺はわざわざお前の左側に回り込んだ。ずっとお前は右手に武器を持っていた。お前は明らかに右利きだ。現に今、武器を右手で握っている。緊急時ほど、習慣や習性は色濃く出る。

だから。

もう、遅い。

格闘家としての、基礎経験値が違う。

ジヨブチェンジしといて、正解だったな。

「破っ！！」

中段、骨という鎧のない脇腹への正拳突き。

会心の一撃。クリティカルヒット。

「う……………」

鬼が小さく呻く。

初めて、声を聞いた。

だけど、そんなことで感動している場合ではない。

鬼がよろめいて、その唯一の武器を手からこぼしたときには、俺は撃ち込んだ拳を引き戻していた。

またも、正拳突きの構え。

ただし、上段。狙いは顎。

「破あつ！！」

一撃必殺。オーバーキル。

金属特有の高い音を立てて、持ち主を失った武器が床に落ちる。

続いて、人体特有の重みのある音を立てて、その持ち主が仰向けに床に倒れる。

……………、……………。

……………起き上がる気配は、ない。

一撃必殺、と謳ったが、死んでもいないだろう。

我ながら見事な、顎への一撃。

それは脳を揺らし、気絶させる。脳震盪というやつだ。

……………。

……一撃必殺が効かない敵キャラ、なんて展開はないよな？

彼は、ぴくりとも動かない。

俺は、その場に立ち尽くす。

ようやく、鳴り響いていた金属バットの音も消えた。

……………。

静寂。

目の前には、赤い鬼のお面を着けた男。

……………。

……………。

……そりゃ、お面を取って、見たくなるのが人情ってもんだらう。

そりりそりり、と近づいてみる。

そりりそりり、としゃがんで。

そりりそりり、と赤いお面に指を掛ける。

もしかしたら、ビビりの汚名は返上できないかもしれないな。

そう、思った。

そう、思ったときだった。

唐突に、衝撃的に、いつそ破壊的に、俺は思い出した。

今の俺は、三百点突破の、馬鹿だったことを。

前世の俺は、砂浜のスイカだったことを。

視界が、歪む。

歪んで、回って、霞んで、暗くなって。

そして、閉じた。

「何だよ。色違いもいるんじゃないかよ」

閉じる直前。

後ろを振り返り、そう突っ込んだ。

俺は突っ込みキャラ、失格だ。

あまりにも弱々しい突っ込みだ。  
そして見たままの突っ込みだ。  
青い鬼のお面と、金属バット。  
その映像だけは、分かった。  
後頭部の痛みは、あまり分からなかった。  
そして、俺の意識は、閉じた。  
この上ないバッドエンド、だ。

戦闘終了。ゲームオーバー。

はじめまして。

あなたにとつての『おはよう』か。

あなたにとつての『こんにちは』か。

あなたにとつての『こんばんは』か。

.....。

ちなみにこっちは なんだろう？

ちよつと、よく分からない。

大変、申し訳ない。

改めまして、自己紹介。

名前は葛平七生。年齢、十七歳の高校三年生。かに座のA型。趣味は、特になし。特技は、状況整理。まあ、どこにでもいるような普通の男子学生、だと思いません。

.....え？

前にも聞いた？

それは大変、申し訳ない。

だけど、少し付き合つてほしい。

それこそ、一生で一度のお願いだ。

俺は只今、走馬灯タイムだ。

千載一遇、一騎当千、国士無双、確変確定、走馬灯チャンスだ。

だから、少しだけ、付き合つてほしい。

あまり長く語るつもりはない。

今までの伏線を、全て解消しようというつもりでもないし。

これからのページを、俺の回想で埋めようというつもりもない。

だって、俺の回想、俺の歴史なんて大したものではない。

たかだか十八年に満たない、歴史だ。

自分自身の意思があるかないかのガキの頃、俺は父さんの勧めで近所の空手の道場に通り始めた。父さんは昔、なかなかやんちゃな青年だったらしく、ときどき警察にお世話になるような青年だったらしい。そのとき、真つ当な道に戻してくれたのが、空手だったと教えてくれた。礼儀作法に、心の在り方。それがなければ、俺は生まれていなかったみたいだ。でもそんなことは、ガキだった俺にはどうでもよくて。ただ楽しかったから、道場に通い続けた。道場でまともに負けた記憶は、俺にはない。小学校中学年あたりでは、既に中学生相手に組み手をしていた。

中学生になり、空手部に入った。その当時住んでいた所は、今より少し田舎で、中学校は全国的には、ほぼ無名だった。俺の一年の夏の大会が始まるまでは。全ストリート勝ちの、優勝。一躍、中学校と俺の名前は有名になった。天才空手少年、として地元紙にも載ったことがある。クラスどころか学校中の人気者になった。その年の冬、翌年の夏、そして冬、ついに四連覇を果たした。誰もが、俺がいれば負けない、と思っていた。俺も、思っていた。調子に、乗っていた。

次の夏、五連覇は叶わなかった。

中学三年だった俺は、中学一年の相手に、負けた。調子には乗っていた。でも、慢心はなかった。それこそ、調子は良かった。だけど、負けた。それも一瞬の、無様な敗北。

理由はいつだって単純。

彼の方が、ただ、強かった。

俺は、天才などではなかった。

俺は、普通の人間、だった。

翌日、俺は部を辞めた。集めた期待が重圧に変わったとか、学校中の除け者になったとか、そういうのはなかった。むしろ、逆。誰もが俺に優しかった。俺はそれを全て、拒絶した。心は、あつとい

う間に、閉じていった。唯一、父さんは優しくなかった。厳しくもなかった。ただ普通に、接してくれていた。「まあ、そういうこともあるだろ」と言ってくれた。救いだっただ。それがなければ、家出くらいは平気でしていた。

中学校卒業の少し前、父さんの転勤が決まった。引越先もすぐ決まった。そのときには俺は、友達は一人もいなかった。ちょうど良かった。家鴨ヶ丘町、が新しい住所。独楽原高校、が新しい学校。全国模試では常に上位を独占、各種スポーツでも華々しい成績。なんてことはない、普通の高校。俺の過去の栄光を知っている可能性は、ないだろう。それは、ちょうど良い。人気者キャラではなく、無愛想キャラから始められる。コンティニューできる。

新しい住所、新しい学校で俺は目的を果たしていた。誰も俺に近づいてはこなかった。とても素晴らしい環境だった。そして何事もなく毎日を過ごし、一学期を終えた。

「酷いなあ。誰だ、なんて。クラスメイトの名前、忘れちゃったの？ 僕だよ。明日木だよ」

一年の夏休み、出会いはその言葉だった。変態であり、友人であり、変態である、明日木翔太との出会いだった。

こいつが俺をかき乱し、ぶち壊し、作り変えた。

その際、一つの事件が起きた。

不用心な俺は、ある少女を傷つけた。身体にも、心にも、傷をつけた。一生消えないであろう傷を。

彼女は、これは私のせいだから、と言ってくれた。

明日木は、悔いる気持ちがあるなら君は変わるべきだ、と言ってくれた。

これ以上ないくらいの、救いだっただ。

突然は無理だけど、少しずつ変わろうとした。三年生になって、

クラスの人気者の主催企画に参加できるくらいまでにはなった。友人は、まだ、明日木だけだったけど。

「これが、俺の歴史。」

十七年と三百六十四日の歴史。

お付き合い頂いたあなたに、最大限の感謝を。

これにて、このお話は、お終い。

「おはよう。葛平くん」

その声で、俺の意識は再生される。

コンティニューされていく。

「って言っても、もうすぐお昼だけだね」

寝すぎだぞ。葛平くん。

ぶくう、と頬を膨らます。

萌え漫画や萌えアニメでしか見たことのないリアクション。

そんなことができるのは、俺は一人しか知らない。

「どういう状況か説明していただけませんか？ 雛村さん」

俺は冷静沈着に敬語で質問した。

いくら特技が状況整理でも、この状況までは整理できない。というか、整理するだけの情報がない。

コンクリート打ちっ放しの、ワンルームの一室のようなところに、俺と雛村がいる。

雛村は俺の最後の記憶と同じく、制服姿のまま。

対して俺は、なかなか異様だ。

両手は後ろ手に固定され、安そうな金属製ベッドの上に寝ている。ベッドの柵の一本には青いロープのようなものが結んであり、お

そらくそれは両手につながっている、と思う。

だけど、そんなことはどうでもいい。

むしろ、そんなことはどうでもいい。

もっとも異様なのは、俺がパンツ一丁だということだ。

.....

..... 変な誤解をしてほしくはないので、一応弁明しておこう。

決して取り乱した上での言い訳ではない。至って俺はクール&ドライである。

葛平七生は、変態ではない。

普通。一般。平凡。

ノーマル。ポピュラー。アベレージ。

そんな男である、俺は。

たとえば、この文章がコピペだと非難されようとも、俺は主張を続ける。

「うーん。何から説明したらいいんだろう？」

雛村が唇を尖らせる。

俺が、漫画やアニメのキャラみたいだ、と思った動作だ。

そのくらい思いつける程度まで、意識ははつきりしている。

「うーん。私、説明下手だからなあ……」

雛村が悩んでいる間に、俺は身体を起こす。両手の固定は外れそうにない。

そして、ベッドの上で色々な体勢を試してみる。

正座。あぐら。体育座り。その他、名前があるかどうかさえ分からない座り方。

俺はいつまでもパンツを女子に見せびらかせるような、そんな男ではない。

そんな性格では、ないし。

そんな性癖も、ない。

見せる、よりは、見る、ほうが好きな男である。

……  
……  
……  
今、極限に必要なこと言わなかったか、俺？

そんなことを感じたとき。

鋭くて、鈍い痛みを頭に感じた。

「っう  
……」  
後頭部を押さえない。だけど、両手は動かない。

俺の記憶の最後のシーンが再生される。

……  
……  
……  
そうだ。

この痛みは 鬼に殴られたときの痛みだ。

「雛村！」

鬼、だ。

とりあえず、鬼がどうなったか、の説明だ。

その言葉を続けようとしたとき、この部屋の唯一の出入り口の扉が開いた。

「お目覚めですか？ 葛平さん」

彼女は、無機質に、言った。

赤い鬼のお面を着けたまま、言った。

……噂をすれば、ってやつか？

いや、まだ俺は鬼というフレーズは口にはしていない。

なのに。

なのに、鬼が現れた。

まずい。

どういう経緯が分からないが、俺は今、動けない。

手が使えない。

鬼と戦えない。

だけど 雛村の盾になるくらいなら。

そう思っつて、ベッドを軋ませて、動き出そうとして、

「安心してください。危害を加えるつもりはありません」

制止された。

そして彼女は、鬼のお面を取った。

美しい、人だ。人間だ。

年齢は多分、俺たちより少し上。

整った顔に、長く黒い髪。

その髪を後ろに縛って、まとめている。

そして何より。

目を惹くのが、その大きさ、だ。

もちろん、背のことだ。

多分、俺よりも高く。

雛村のより、遥かに大きい。

もちろん、背のことだ。

彼女がこちらに近づいてくる。

大きく上下しながら、近づいてくる。

もちろん、背のことだ。

彼女が俺の目の前に、雛村の隣に立って、再度実感する

大きい。デカイ。

その迫力に圧倒される。

雛村と比べると、より一層。

月とすっぽん。

東京ドームと野球ボール。

高級ベッドとマシユマロ（一袋百円）。

無地の白いTシャツに、シンプルなジーンズ。それが、その大きさを、これでもか、と言わんばかりに強調している。

あ。もちろん、背のことだ。

今の俺の変態的状况や、人喰い鬼のことなど、どうでもよくなるような、大きさだ。

もう後先考えずに飛び込みたくなるような、大きさだ。

「ずううううつと、葛平くんは何を凝視しているのかニヤァ？」

我に返ると、目の前には猫の鳴き声を真似る獅子がいた。

ありえないほど、笑顔な獅子だ。

「途中で私と比較して。何度も言い訳を入れて。何行にもわたって描写して。一体、何を見ていたのかニヤァ？」

俺は、一言も発せない。

何か言えば、狩られそうな気がした。

「このヘタレチキン野郎が」

笑顔のまま、ありえない台詞を吐き捨てた。

……。

……キャラ変わってますよ。雛村さん。

.....  
そんなことは絶対に、言わないけど。  
そんなことは絶対に、言えないけど。

「楽しい会話中に申し訳ありませんが、私の用事を済ませさせてもらってもいいですか？」

巨.....。

巨体な彼女が、相変わらず無機質に、言った。

「ああ、ごめんなさい。影虎かげこらさん」

雛村が笑顔で謝る。

その笑顔は、先ほどの笑顔とは全くの別物に、俺には見えた。

「かげ、とら？」

俺は馬鹿みたいに呆けて、雛村の言葉を繰り返す。

「そう。『影』『虎』さん」

雛村は自分の影を指差し、その後、がー、と虎のポーズを取った。

.....それ、女性の名前じゃないだろ？

目の前の大きな彼女は、どこからどう見ても女性だ。ありえないほど女性だ。

第一、男でもそんな名前のやつには会ったことはない。そんな忍者みたいな名前。

だけど、俺も名前については他人のことは言えないので、口にはしなかった。

ていうか、この部屋には、虎と獅子がいるのか？

虎と獅子と、ベッドに縛られたパンツ一丁の男。

何プレイだよ？

ていうか、自滅だよ。

素直に、自殺だよ。

.....。

.....自殺。

そつだ。俺たちは。

そうだ。雛村は。

「ご準備をお願いします。沙雪さんがお待ちになられています」

相変わらずの無機質、無表情で影虎は言った。

寝ていたその部屋で、俺は自分の制服を着ていた。

「こちらの不手際とはいえ、また暴れられても困りますので、拘束させて頂きました。大変、失礼致しました」

一度、深々と謝罪してから、影虎さんは両手のロープを解いてくれた。

「危険物所持の確認のため、服も脱がせてもらいました。それと、少し汚れていたので洗濯をさせて頂きました」

そう言って、制服も渡してくれた。

シャツにあつた得体の知れない黒いラインは、一本も残っておらず、新品さながらの白さ。

……ありがとう。影虎さん。おかげで母さんに怒られずに済む。上下の装備を完了して、一緒に渡してもらった自分の携帯電話を見る。

七月六日の土曜日、午前十一時三十九分。

雛村の言つとおり、俺は少し寝すぎだ。

いくらテスト明けの土曜日だとしても。

ちなみに雛村は、

「着替えるなら、私は外で待つてるね」

と部屋から出ていった。

いや、着替える、じゃなくて、着る、だから、とか。

それよりも前に、ずっと俺のパンツ一丁の姿を見ていたじゃん、とか。

そんな野暮ったいことは、言わなかった。

「お待たせ」

家具がベッドしかない、殺風景な部屋を出た。

ドアの横の壁にもたれて、雛村は待っていた。

影虎さんは、凜と直立して、待つてくれている。

「それでは、こちらへ」

その姿勢のまま、影虎さんは歩き出す。

俺たちも、その後ろに付いて歩き出す。

「ここは、あの地下通路、か？」

「そうだよー」

雛村はのんきな声で答える。

周りを観察する。

大きな吹き抜けのある空間。その周りには同じ形のドアが並んでいる。おそらくその向こうには、さっきの部屋と同じものがあるのだろう。部屋は全四階。部屋数は、面倒なので数えたくない。そして俺たちは今、二階部分の廊下を歩いている。ホテルの一部が地下にある、っていう感じだ。

……一体、何の施設なんだろう？

そう思ったが、口にはしなかった。

影虎さんは目測どおり、俺より少し大きくて（もちろん、背のこたど）、姿勢良く歩くので、俺も気を抜くと置いて行かれそうになる。雛村に関しては、軽いダッシュをしている。

影虎さんの案内で、俺たちは一階の吹き抜け部分に降りた。見上げると、やはり結構大きい建物だ。

一階部分は、実に生活感のあるものだった。

大きな薄型テレビの前に、こちらも大きな背の低い長テーブル。テーブルの上にはペットボトルやらスナック菓子やらの食品が並び、それを囲うように長いソファアが置かれている。

そして、そのソファアに誰か座っている。

俺たちからは、ちょうどその後頭部だけが見える。顔は見えない。

「沙雪！」

雛村が名前を呼んだ。叫んだ、と言っても過言ではない。

ソファアの誰かがビクリと立ち上がる。まだ、こちらは向かない。

「……みっちゃん？」

ゆっくりと彼女は振り向く。

その声は、幽霊でも見たような、混乱と驚きの入り混じった声。

……幽霊でも見たような、はこっちの気分だよ。

佐々良沙雪。

彼女は、佐々良沙雪だった。

足も、腕も、五体全て揃った、佐々良沙雪だった。

「沙雪！」

雛村は、今度は確かに叫んだ。

そして駆け出した。今までの軽いダッシュとは比にならないほどに。

佐々良も、こちらにゆっくりと歩み寄ってきた。

「沙雪」

今度は優しく呼んで、勢いそのまま佐々良を抱きしめた。軽い交  
通事故くらいの勢いだ。

そして雛村は黙った。言葉を失った。

対する佐々良は抱きしめられた衝撃で、目を丸くしていた。

そしてゆっくりと、ゆっくりと目を細めて、

「……みっちゃん」

ボロボロと大粒の涙を流して、泣き出した。

うわーん、うわーん、と泣いた。

それを合図に、雛村も泣き出した。

うわーん、うわーん、と泣いた。

うわーん、うわーん、と二人は泣き続けた。

目からも、鼻からも、口からも、流せるもの全て流して。

顔も、くしゃくしゃに、真っ赤にして。

赤ん坊のように、サイレンのように、泣き続けて。

お互いの存在を確かめ合うように、強く抱きしめ合う二人。

そんな二人を、俺は呆然と見ていた。

そんな光景を、俺は、美しく思った。

「葛平さん。付いてきてもらえますか？」

しばらくして、影虎さんは俺に声を掛けた。

抱き合う二人は、ひとしきり泣いて、落ち着いてきていた。少し過呼吸にはなっていたけど。

「お二人の邪魔をしても悪いですし」

相変わらずの無表情。だけど、口調は嬉しそうに思えた。

俺も感動の再会を邪魔する気もないし、何より、疑問が山積みだった。なので、静かに頷いた。

そしてまた、影虎さんの後ろを付いて歩いた。彼女は変わらず、無駄のない歩みだ。

吹き抜けにつながる一つの通路に入る。構造は昨日、雛村を背負って駆け回った地下二階と同じ。ただし、足元の照明は全て正常で、ずいぶんと明るく感じる。

ついでに、雛村を背負ったときの感覚も思い出す。

そんなこと思い出しながら、歩きたび左右に揺れる影虎さんの長い髪が目に入る。

……前から見たら、上下に……。

なんて、不謹慎なことは言わない。

俺は、紳士だ。変態紳士なんかではなく。

思っても言わないのが、紳士だ。

思い出しても顔に出さないのが、紳士だ。

思う時点でどうなのか、という愚問はここでは却下させてもらう。

などと、極めて紳士的な思考をしていると、広い空間に出た。

「お連れしました。ヨウコさん」

ドーム状の空間。東京ドームよりはもちろん大きくない。行ったことはないけど。

中央に巨大な円筒形の何か。その根元の辺りに大きめの金属ラックがいくつかと、そこに並ぶ青白く光るモニター群。そのモニターを全て見渡せる位置に、デスクが一つ。

影虎さんが声を掛けると、デスクの前の椅子が動いた。いや、よく見るとそれは車椅子だった。

少女？

車椅子からこちらを見ているその顔は、幼い。

影虎さんは声を掛けると同時に、少し駆け足で少女のところへ向かった。そして車椅子を押して、こちらへと戻ってきた。

車椅子の彼女の顔を、正面から見ると。

確かに、少女だった。

透き通るような白い肌と、真っ白なワンピース。

純白、というより、病的、という印象を俺は抱いた。

その彼女が、俺の前まで来て、その小さな口を開く。

「ようこそ『似て非なる楽園』へ。葛平七生」

その声は、少女のもの。

その口調は、落ち着いた大人の、貫禄さえ感じるものだった。

「君は何を知りたい？ ここがどこなのか？ 私が誰なのか？ 鬼は何なのか？ 佐々良沙雪が何故、生きているのか？ それとも、全て、か？ ああ、大丈夫。私は欲張りが嫌いではない。かく言う私も、なかなかの欲張りだからな」

少女の、少女らしからぬ言葉の連打に、俺は答えを返せない。

「ああ、失礼。私が誰なのか、は自ら言うべきだな。私としたことが、あるまじき失態だ。珍しいな。ツチノコ並みの珍しさだ。おそらく今世紀最大の大発見だ。誰かに自慢するといい、葛平七生」

もはや口を開くことすら、できない。

「私は、人観ひとみヨウコ。人間を観察する、で人観。下は片仮名で結構だ」

それとも、とさらに続ける。

「検体番号第十三号、と言った方がいいのかな？」

そう言っ、人観ヨウコは微笑んだ。

実に、少女に似つかわしくない、意地悪そうな笑顔だった。



「けん、たい？」

ようやく、俺は口を開く。いや、口だけならもう既に開いていたかもしれない。

あいにく俺は、漫画やアニメの世界の住人ではない。自分のことを僕と呼ぶ女の子には会ったことはないし、さえない男の子が突然モテモテになる展開を見たこともない。

だけど、容姿に似合わず饒舌に不遜に話す少女には会ったことはあるし、見たこともある。

というか、今だ。今まさに、だ。

「おお。ようやく喋ったな。殴られた衝撃で、言葉までも失ったかと心配していたよ」

人観は未だ、意地悪そうな笑顔。

「これ以上、君の知能が低下したらどうしようかと杞憂していたが、その必要はなかったようだな」

……………

「……てめえはどうやら俺を馬鹿にしてるみたいだな」

「おお。私の言っていることが分かるのか。なかなか賢いな、葛平七生。ちなみに、君の今の言葉を添削させてもらうと、『してるではなく』している』『が正しい。さらに言わせてもらうと、『どうやら』と『みたい』は必要ない」

「てめえは俺を馬鹿にしている！」

すぐに修正できた俺は、なかなか賢い。

「だがそれでも多少の語弊が残る。私は君を馬鹿になどしていない。むしろ哀れんでいる。だけど、君が悲しむ必要はない。安心してくれ。私のような生まれつき有能な人間が、必ず君を導く。だから安心してくれ、葛平七生」

「……色々と言いたいことはあるが、ここは堪えよう。俺も、もう大人だ」

そうだ、いよいよ十八だ。

「だが、一つだけ言っておく。年上の人間を呼び捨てするのは感心しないぞ。人観ヨウコ」

煮えたぎる感情は一切顔にも言葉にも出さず、俺は大人の対応をした。

実に、紳士的な対応だ。

「その言葉、そっくりそのまま君に返そう。私はこう見えても君より年上だ。人は外見で判断するべきではない。君にぴったりの教訓だ。おおかた、影虎のことも『巨乳美人』としてしか見ていなかったのだらう。そんなことだと、君とこの国の将来が不安になるよ。葛平七生」

……てめえ。俺がずっと我慢していた『巨乳』というフレーズを簡単に！

「まあ、そうは言っても私は君を見捨てたりはしない。先ほど言ったとおり、君を導こう。君の問いに答えよう。このまま君と私のやりとりを何行にもわたってしていても、読者の方々に申し訳が立たないからな」

いや、こんなことを言っでは世界観が崩れるかな？

と、人観は笑う。

「君は忘れてしまっているかもしれないから、もう一度訊こう。君は何を知りたい？ ここがどこなのか？ 私が誰なのか？ 鬼は何なのか？ 佐々良沙雪が何故、生きているのか？ それとも、全てか？」

……。

「……全て、だ。全て教える。人観ヨウコ　さん」

「おお。命令口調になってるのはいただけないが、敬称を付けられたことは素直に褒めてあげよう。君の将来が楽しみになってきたよ、葛平七生」

そんなことを、楽しみ、ではない笑顔で言った。

「だが、まあ。時間も時間だ。昼食でも取りながらにしよう。空腹では理解できるものもできなくなるからな。それに、君の苛立ちも食事で少しは解消できるだろう」

「ああ。俺の苛立ちが食事程度で少しでも解消できると、素晴らしいな」

そうして、人観は動き出した。正確には、影虎さんが車椅子を押して動かしているのだが。

俺も黙って、その後について歩いた。

この空間に入ったときに人観がいたデスクの近くに、吹き抜けにあったものほど大きくはないが、とはいえ三人は十分に腰掛けられる程度のソファと、同じくらいの大きさの長テーブルが置いてあった。

テーブルの上には、コンビニのサンドウィッチや菓子パンがいくつか並んでいた。

「好きなところに掛けてくれ」

人観の言うとおり、俺はソファに腰掛けた。

「紅茶を淹れてきます」

人観の乗る車椅子を、テーブルを挟んで俺と向かい合うように固定して、影虎さんは来た通路を戻っていった。

「まあ、こんなものしか用意できていないが、好きなものを食べてくれ。ただし、メロンパンは私のだ。ちよつと、取ってもらってもいいか？」

俺は目の前のメロンパンを手に取り、人観に投げ渡す。

「おお、ありがとう。これだけは誰にも譲れないんだ」

手際よく包装を開き、モグモグとメロンパンを頬張る人観。

小さな手で、小さな口で、食べる姿はどう見ても少女そのものに見えない。

「女性の食事姿をジロジロと見るのは、あまり感心しないな」

「ああ。それは失礼した」

人観に女性という印象は受けないけど、確かにそんなことを聞いたこともある。

「それに、私のような可愛らしい少女をジロジロと見てみると、君がただの変態ロリコン野郎に見えてしまう」

「ああ。あんたは失礼だ」

「はあー。また敬称がなくなったな。君の記憶力が心配になってきたよ。果たして、質問に全て答えたところで、君が覚えていられるか不安になってきた」

「安心してくれ。『あんた』が無駄なことを言わなければ、覚えていられる自信はある」

俺はここでサンドウィッチを一つ、手に取った。

「……仕方ない。君が敬称を使いこなすことは諦めよう。私は君より、大人だ。だけど、そんな人生の先輩から君に一つ、助言を送ろう。『無駄なこと』なんていうものは、この世の中には一つだけだ。『無駄なこと』自体が『無駄なこと』なんだよ。矛盾になっているけれどね」

「そんなことを口の周りにメロンパンを付けて、してやったり顔の大人に言われても、心には一切響かない」

「そうか。現代の若者は不感症だと聞いていたが、本当のようだな」

「あんたのその姿で、不感症、とか言うんじゃない」

「どうしてだ？ 別段、おかしなことを言っただけでもない。君がそういう解釈をするのが問題だ」

「う……」

言葉に詰まる俺。

ここで正論を振りかざすのか、この女。

ってやりとりを、昨日もした気が。

「何も君が、何をしてもされても一向に反応のない情けのないモノを、ぶらさ」

「食事中だ！ 変な話をするんじゃないねえ！」

持っていたサンドウィッチをテーブルに投げつけた。

「どうしました？」

ティーカップを二つ、お盆に乗せて持ってきた影虎さんが、相変わらずの無表情で訊いた。

「いや、大したことではない。現代の若者がキレやすいことと、無駄だと思うことが無駄という話をしていただけだ」

そうですか、とだけ言っつて影虎さんはカップを二つテーブルに置いた。

「では、私も向こうで昼食を取らせていただきます」

そう言い残して、影虎さんは再び通路を戻っていった。

そしてまた、人観と俺が残された。

「そういえば、無駄なことなんていうものはないという話だが」

一口、紅茶をすすり、人観が言った。

「またその話からスタートするのかよ」

先ほど投げつけたサンドウィッチの包装を、俺はここでようやく開く。そして、食べ始める。

「私がメロンパン好きだというのも、無駄にはならない、とても大事なことだ」

「そんな伏線に重要性があるとは、俺にはとても思えないんだが」

そんな小説も、俺は読まない。

「はあー。それだから、君はまだまだ子供なんだ」

いや、見るからに子供にいわれても。

「もしもこれからグッズ展開をするような際には、コンビニと提携して『ヨウコちゃんのメロンパン』を売り出せるじゃないか」

「それは確かに『大人』の話だな」

というかグッズ展開って何の話だよ。

世界観が云々の話はどこへ行つた？

「そしてその収入で私はメロンパンを買う。メロンパンが売れると、メロンパンが買える。これぞ現代の錬金術だな」

「その等価交換は限りなく無意味だな」

というか、正確には等価ではないし。

「何を言う。メロンパンによって世界に平和が訪れるのだ。これ以上有意義なことはない」

「俺にはメロンパンをボロボロこぼしながら、そんな空想を熱く語る事が、無駄にしか思えないよ」

人観が熱くなればなるほど、俺は冷めていっていた。

こいつ、本当は年下なんじゃないかと。

そんなやつが馬鹿話に付き合っているんじゃないかと。

はあー、と今日一番のため息をつく人観。

「無駄なことなどない、と今さっき教えたばかりなんだが。本当に君の記憶力が心配だ。だが、私は約束を守る大人だ。君の知りたいたてを、私を知るだけ教えよう」

人観の口調が変わった。初対面のとときの真面目モードだ。

俺も真剣に聞く体勢に入る。

「いよいよ、本題に入るう。こんな何の意味もない無駄話はやめにして」

「自分で無駄って思ってるんじゃないか！」

トラップだった。

身構えた自分が恥ずかしい。

「当たり前だ。無駄なことなんて無数にある。第一、この小説自体がこの上なく無駄だ」

「前言撤回した上に、この小説を否定した!」

「そう大きな声を出すな。ガミガミとうるさい。あまりうるさいと、私も悲鳴を上げるぞ」

「……何故、悲鳴を上げる?」

「悲鳴を上げれば、向こうの影虎や雛村美月が何事かとやってくるだろう。そして私は、葛平さんが私を急に押し倒そうとして、と涙目で言う。これで晴れて、君は変態ロリコン野郎の称号を得る、という寸法だ」

「すいませんでした、人観さん! 大人しくしていますので、お話を続けてください」

俺の心は、爪楊枝レベルで折れた。

「よし。その調子で私のことを、人観さま、と呼んでみよう」

「……そこまで、俺は堕ちていない」

折れても、爪楊枝にだって誇りはある。

「そうか。それは残念だ。君とは仲良くやれそうな気がしていたんだが、とても残念だ……」

人観が音を立てて空気を取り込む。そのペシャンコな胸が、少しだけ膨らむ。

「すみませんでした、人観さま！　どうか無知な俺に色々教えてください！」

折られ、先端を潰され、爪楊枝は役目を失った。

「ふう。君が最初からそうやって素直なら、私もこんな無駄な苦勞をしないで済んだのだが」

……また、無駄って言った。

なんてことは、絶対に口にしない。

俺は黙って、静かに話を聞く体勢を整える。

「まずは、ここがどこなのか。それから説明しよう」

今度は本当に真面目モードのようだ。

「その昔、といってもそれほど昔ではないが。世界は大きな戦争の危機に面していた。地球全土を戦場、焦土にするような戦いが。つまりは第三次世界大戦が」

「第三次？　世界大戦は第二次までだぞ」

「まだ説明の途中だ。まったく気の早い男だ。あっちの方も早いか？」

「？」

「どっちの方が、皆目見当が付かないな」

大きな声が出せないので、突っ込みも実に弱々しい。

「まあ、君が早いのかどうかは、今は後回しにしておこう」

……後には回ってくるのかよ。

「結論として、戦争は起こらなかった。各国の協力で実に平和的な解決を果たした」

平和的な解決を、と人観は繰り返し、意地悪く笑った。

「戦争は起こらなかつたが、危機は確かにあつた。もちろん、この矮小な国にも」

ありえない歴史を、教科書に載っていない歴史を、語る人観。

俺はそれを、ただ黙つて聞いていた。

「そして、この国が有事の場合を想定して取つた手段の一つが、国家再生計画。実に消極的な計画さ。たとえ国が減んでも、また全く同じものを最初から造ろうという計画。その方法として、この国で起こつたこと、とはいえ国家事業やそれに付随するものに限るが、それらを全て記録するものを作つた。ただ、記録のみに特化したスーパーコンピュータの誕生だ」

ここまで語り、人観は紅茶を飲んだ。

俺も、紅茶を口にした。既にかなりぬるくなっていたが、渴いていた喉には丁度よかつた。

「しかし、計画担当者は不安になつた。開発当時の通信技術では、どうしてもそれを、国の中心部に設置するしかなかつた。だが、そこは戦火に巻き込まれる可能性が非常に高い。いくら地下のシェルターにあるとはいえ、安心とは言えなかつた。だから彼らは、もう一つ同じものを作つた。『全く同じ情報を共有し続けるもの』を。その頃には通信技術も進歩していて、戦場となる可能性の低い片田舎に設置できた。それが、あれだ」

そう言つて、人観が指差す。

俺がここに来て真つ先に目に付いた、巨大な円筒形の何かを。

「まあ。結果として戦争は起こらず、あれが役目を果たすことはなくなつた。ただどあれも、オリジナルも、その機能を維持し続けている。生き続けている。そしてあれの機能を利用して、私たちは活動をし続けている」

皮肉な話だがね、と人観はまた笑つた。

「活動、つて何だよ？」

俺は質問した。紅茶を飲み干した。

「そう話を急ぐな。まったく君は早い男だ」

そんな軽口に、俺はもう突っ込まない。

そんな無駄なことを、したくなかった。

「では次に、私が誰なのか。鬼は何なのか。そして、佐々良沙雪が何故生きているのか。その三つに答えよう」

君の記憶力を期待して話を進めるが、と前置きをして人観は話した。

「私の正体は検体番号第十三号。とある実験の、とある人物のクローンだ」

「……クローン、だと？」

そんなことをさらりと言われても、信じろという方が無茶だ。

「ああ、そうだ。その、通りだ」

「ただ、それが当たり前のように人観は頷く。」

「第二身体計画、通称スペアパーツ計画の、実験サンプルのクローンが、私だ」

まるで他人の話のように彼女は語る。

「計画の目的はシンプルだ。オリジナルの一部が欠損や劣化した場合に、クローンのその部位を使って修復する。クローンをオリジナルの『スペア』の『パーツ』とする考え方だ」

「……………」

欠損。劣化。修復。

それは、人間に使う言葉、ではない。

「そして計画の第一歩として、完全管理の完全培養で作られたのが、私たちだ。私はその十三番目だ」

「私、たち？ 他にも」

「みんな死んだよ。私以外は一人残らず」

俺の言葉を、人観は続けさせなかった。

「所詮、試験管の中で人間を作ろうというのが無理な話だったんだ。実に、無駄な、実験だったんだよ、と笑った。」

「それでも、研究者たちは諦めなかった。唯一の生存例である私を

調べ、そして一つの結論を出した。試験管の中から人間は生まれな  
い。今どき小学生でも知っているような答えだ。そして、その答え  
から彼らは次に何をしたと思う？」

人観は質問する。

俺は答えられない。

待たれてもいない。

「試験管よりも優秀なものから人間を生み出そう」

つまり。

「人間にクローンを生ませようという話だ」

……………

「……………狂ってる」

ただの感想として、俺は呟いた。

「ああ、狂っている。彼らも成果が出ず、追い詰められていた。だ  
けど、実験は続行された。数年間、数十体の母体に対し、もちろん  
本人に無許可で、実験は行われた。どこかの誰かから、全く別人の  
どこかの誰かのクローンが生まれた。その結果が、影虎や他の鬼、  
そして佐々良沙雪だ」

淡々と語られる話を、俺はなんとか理解する。

だけど、感情が追いつかない。

人観だけでなく。

影虎さんも。

そして佐々良も。

クローンだというのか？

それも。

両親とは、全く関係のない、別人。

「だけど、実験は中止になる。成果が出ないものに、資金は出せな  
い。当たり前の話だ。しかし、成果は出なかったが、過程は残った。  
この上なく、厄介なものが。世間に露見してはならない、役目を果  
たせない、なのに生き続けているものが」

だから。

「だから、出資者たちは処分した」

……処分。

それも、人間に使うべきではない言葉。

「だが、処分は完了しなかった。研究者の一人が、途中でデータを破棄したからだ。せめてもの償いとして、残りのみんなを助けようとした」

私に言わせれば、単なる自己満足だよ。

「しかし、それもまた、完了しなかった。第三次世界大戦の遺産があった。この実験も記録されていた。記録しかできないものに対して、情報の破棄はできなかった。だから研究者は、暗号化という情報を記録させ、実験の情報を隠した」

そこで、人観は紅茶を飲み干した。

そして、

「ああ、失礼。おかわり、いるかい？」

まるで雑談の合間のように、俺に訊いた。

「いや。大丈夫だ……それで、その後、どうなった？」

「その後の話は、大して面白いものではない」

本当に面白くないような表情で、続けた。

「結局、情報を暗号化しただけだ。いつかは解読される。そして処分される。けど私も、遺産のもう一对の存在を知り、手に入れて活動している」

遺産のもう一对。

全く同じ情報を共有し続けるもの。

オリジナルに対しての、「コピー」。

役目を果たせないのに、生き続けるもの。

皮肉な話だがね。

と、あのとき、人観は笑っていた。

「こちらはオリジナルと違い、存在は忘れられていたから、隠れ家としてもちようどよかった。私たちはもう、堂々と外を歩けない身だから。やつらに見つかれば、処分されるからね」

私たちのことも、忘れてくれればいいのに。

人観は、意地悪く、笑い続ける。

「さつきからあんたが言っている、活動、って何なんだ？」

「ああ、失礼。その説明を忘れていた。私としたことが、あるまじき失態だ。今世紀最大の大発見は、更新だな」

最初に会ったときの軽口を、人観は繰り返した。

「一人の研究者の意志を　いや、遺志、を受け継ぐこと。遺産のオリジナルの方で解読された情報を元に、やつらより先に処分対象者を見つけ、助ける。私は、私の家族を助ける。身を隠す場所を与え、顔を隠す仮面を与え、家族に生き続けてもらう」

私のも、単なる自己満足、だよ。

相変わらず、笑って、言った。

「と、私が君に教えられるのは、この程度だ。ずいぶんと長々と話して悪かった。何か質問はあるかい？」

「……正直、まだ頭が混乱していて、質問とかできる状態じゃない。そうか、と人観はあっさり頷いた。

俺の記憶力云々については、何も言わなかった。

「まあ、そんなに深く考える必要はない。昨日、家族が間違っただけだ。君の制服がやつらのスーツに見えたそうだと続けた。」

確かに、ブレザーのない制服は、上着を脱いだスーツにも見える。特に、あの暗い通路では。

「一昨日の夜、沙雪を助ける際に、やつらと一悶着あったばかりで、その翌日に彼女の親友を連れて歩く男を、私たちのテリトリーで見かけた彼らは、やつらが人質を連れてやってきた、と思ってしまうんだ。彼らは悪くない。全部、私の不手際だ。本当にすまない。頼む。どうか許してほしい」

人観にしては珍しく、素直に、謝った。

ずいぶんと、その彼らをかばっている。

家族、に対しては甘いみたいだ。

「どうしても言うなら、私が全裸で謝ってもいい」

「……その謝罪方法はよく分からないが、そこまでしなくてもいい」  
「そこまで、ということは全裸でなく半裸ということか。なかなか君も面白い趣味をしている」

「一切脱がなくていい！ 俺に変な趣味はない！」

「変な趣味、とは聞き捨てならないな。それでは私がるで異常だと聞こえる」

「……さっきまで異常な話をしていましたけど？」

「よし、分かった。私の魅力を、君に嫌というほど見せてやろう」  
そう言って、ワンピースの裾に手を掛け、めくろうとする人観。

「嫌だ！ もう嫌だ！ 見る以前に嫌だ！」

俺はテーブルの上に身を乗り出し、その手を押さえた。

「何をする！ やめる！ 離せ！」

「やめない！ 離さない！ 諦めろ！」

バタバタと暴れる人観を、俺はそのまま押さえ込む。

「何、騒いでるの？ 葛平くん」

そこに来たのは、雛村だった。

「……………」  
……………  
状況整理。俺の特技。

人観は、自分のワンピースの裾を握って、離せと言っている。

俺は、人観の手を握って、諦めろと言っている。

雛村は、今、その場面だけを見ている。

「……………」  
……………  
「ち、違うの！ 葛平さんは悪くないの！ 全部ヨウコが悪いの！」  
人観が叫ぶ。

その声は、加害者を必死にかばう被害者の、幼い少女の声だった。

「……………」

雛村は何も言わず、表情も変えず、そのまま戻っていった。

「違うの。葛平さんは悪くないの。全部ヨウコが悪いの」

意地悪な笑顔で、同じ言葉を繰り返す人観。

その通りだ。

全部、あんたが、悪い。

「なんで俺が、こんなことをしなくちゃならないんだ」  
恨めしい言葉を呟きながら、俺は作業を続ける。

吹き抜けの一階部分、大広間と人観が呼ぶ所。  
そこにつながる一室に俺はいた。

広さも作りも、今朝目覚めた部屋と全く同じ。

ただし家具は一切なく、その代わりに山積みダンボール。

「そろそろ誰かが整理しなくては、とは思っていたんだが」  
と、する気のない人間の決まり文句を、人観は言った。

「今、みんな出払っていてなあ」

困った困った、と困っていない人間の決まり文句を、人観は言った。

「どこかにやってくれる、心優しい人はいないかなあ？」

俺の顔をガン見して、人観は言った。

「そうか。やってくれるか。やはり君は心優しいな」

思ってもいないことを、人観は言った。

「そんな君が、雛村美月に『変態ロリコン野郎』と思われるのは、私も心苦しい」

思ってもいないことパート2を、人観は言った。

「よし。雛村美月には、あれは誤解だと私の方から言っておこう。

君は心置きなく、作業に取り組んでくれ」

.....

.....

そして、俺は『自分の意思』でダンボール整理をしている。  
倉庫として利用されているこの部屋には、食料品やら雑貨やらが  
何の法則性もなく、置かれている。

普通の人間なら、心が折れてしまうような悲惨さだ。

だが、その点に関して俺は普通ではない。

片付け好きの本能が燃える。俺は典型的なA型だ。次々とダンボールをジャンル分けし、きれいに積み上げていく。我ながら見事な手際だ。

そして、残りの作業も半分くらいなつたところで、

「あ、あの。葛平くん。ちょっと、いい？」

聞き覚えのない声が出た。

ドアの方を見ると、あまり見覚えのない顔があった。

「ただ、俺の記憶力は優秀だ。クラスメイトの顔くらいは覚えていられる。」

彼女は、佐々良沙雪だ。

「どうした？ 佐々良」

作業の手を止め、佐々良とちゃんと向き合う。

「あ、あの。忙しかったら、後で、でもいいんだけど……」

俺と佐々良の目は合わない。

佐々良の目があちこちに泳いでいるからだ。多分、マグロといい勝負だ。

……そういえば、極度の人見知りだったな。

俺も、あまり人のこと言えないけど。

「いや。大丈夫。ちょうど休憩しようと思っていたから」

本当は休憩の予定はない。

「ただ、極度の人見知りの佐々良が、自ら話し掛けてきたんだ。それを断るほど、俺は野暮な男ではない。」

「大広間で話すか？」

「ここは単なる倉庫だ。椅子などない。」

「あ、いや。ここで。ここでいい」

「佐々良が細かく首を振る。」

昔流行ったハムスターを連想させるような動きだ。

「そうか。それじゃあ、これ、座れよ」

俺は近くにあったダンボールを持ち、佐々良の近くに置く。

ペットボトルの入った未開封のダンボール。

見るからに軽そうな佐々良で潰れることはないだろう。

「あ、ありがとう」

ちよこん、と座る佐々良。

ダンボールの方が重いような印象さえ受ける。

そして俺は、その隣の床に直に座る。

体重的にダンボールは不安だし、適当なものも近くにはなかった。

「で、どうした？」

結果的に、俺は佐々良を見上げた。ただし、それほどではない。

雛村同様、佐々良も小さい。

依然、目線は合わない。

「よ、ヨウコさんの話、聞いたんだよね？」

「ああ。聞いた。まだ整理しきれてないけど」

「だけど、分かっていることはある。」

隣にいる佐々良が、どこかの誰かのクローンだということ。

本当の家族とは、本当に他人だということ。

もう二度と、堂々と外に出られないこと。

「私も、まだよく分かってない、かも」

そう言って、佐々良はうつむいた。

「夜、突然大人の人たちが来て、脅されて無理やり遺書を書かされ

て、屋上に連れてかれて、でも皆さんが助けてくれて、それで……」

声はどんどん弱々しくなっていた。

佐々良は今にも泣きそうだった。そのときの恐怖が蘇ってきたの

だろう。

「それ以上言わなくていい。もう、言わなくていい」

俺は言葉を遮った。

「ご、ごめんなさい。葛平くんにこんな話をして」

「謝るな。それと、気にするな」

言葉を自分の限界まで優しくする。

今の佐々良は、俺のガラスハートの比ではないくらい、脆そうだ。

「……みつちゃんと同じこと、言ってくれるんだね。葛平くん  
佐々良は微笑んだ。弱々しいが、微笑んだ。

「……雛村も、全部知ってるんだな」  
自分の親友の話を。

俺のように、ただのクラスメイトの話として、ではなく。

「うん。ちゃんと聞いて、ちゃんと分かってくれた」

さつきよりも、強く、微笑んだ。

親友が分かってくれたことが、何よりの支えになっているんだろ  
う。

俺も、その気持ちなら、分かる。

「そして、葛平くんもちゃんと分かってくれる、って言った」

「俺が？ ずいぶんな過大評価だな」

こっちは状況整理で手一杯だったのに。

「葛平くんは普通じゃないくらい優しいから、って」

「俺はまだ変態扱いなのか……」

「変態？ 何の話？」

「あ、いや。こっちの話」

佐々良には関係ない話。

俺には重要な話、だけど。

「そつえば今、雛村は一緒じゃないのか？」

せつかく再会できたんだ、片時も離れたくないんじゃないのか？

「みつちゃんは今、ヨウコさんに呼ばれて行ってる」

「……そうか」

人観ヨウコ。約束は果たさせよ。等価交換だ。

「で、ちようどいいから葛平くんのところに来たの」

「ちようどいい？ どういうことだ？」

「葛平くんだけに、聞いてほしい話があるの」

俺だけに？ 何の話だ？

「最初ね、ここでみつちゃんに会ったとき、驚いたの」

「まあ。俺もこんなところで佐々良に会ったのは驚いたけど」

本当は、もう死んでいると思ってたし。

「それもあるけど。もう一つ、あるの」

もう一つ？ いやいよ何の話だ？

「みつちよんが葛平くんと一緒だったことに、驚いたの」

「確かに俺も、まさか雛村と一緒に行動するなんて思ってなかったよ」

クラスの人気者と、無愛想キャラが。

「違うの。そうじゃないの」

佐々良が、否定する。

「みつちよんが、男の人と一緒に、っていうのに驚いたの」

本当は私が言ったらいけないんだけど、と続けた。

「みつちよん、男の人が駄目なの 男性恐怖症なの」

「男性、恐怖症？」

……あまり聞き慣れない言葉だ。

でも、ニュアンスで意味合いは分かる。

……あれ？

「でも、クラスの男子とは仲良く話してなかったか？」

雛村は人気者だ。クラスの中心だ。

男子と話す機会は、俺以上だ。

「うん、話してた。でも、必ず私や他の女の子と一緒に」

じゃないと、無理なの。

「……………」

そうだ。

確かに、そうだ。

雛村は、クラスの中心、の以前に、女子の中心だ。

本当に私のすべき話じゃないんだけど、と前置きをして佐々良は言葉を続ける。

「みつちよんのお父さん、と言っても十年以上前に離婚してるらしいんだけど。そのお父さんが、あまり優しい人じゃなかったみたいなの」

「……………」

俺は、雛村の秘密を、佐々良から聞く。

「それが原因で、男の人が、特に、男の人の『手』が、駄目なの。怖い」

「男の、手……………」

俺は自分の手に視線を落とす。

男の手に対する恐怖。

それがどうということなのか。

馬鹿な俺だって、分かる。

心当たりは、確かにあった。

地下に来て、最初に雛村に会ったとき。

雛村を地上に連れ出そうとしたとき。

俺が、手を、差し出したとき。

そのとき、雛村は拒否した。

いや、あれは、恐怖だったんだ。

それなのに、俺は気付きもせずに雛村の隣を歩き、さらには、緊急時とはいえ彼女の手を握った。

自己満足、なんかじゃない。

俺はただの、自己中心、だ。

あの夏から、ちっとも成長していないじゃないか。

「でも、みつちよんは普通に葛平くんと、ここまで来た」

……………まあ、俺は来たときの記憶はないが。

「だから」

あちこち泳いでいた佐々良の目が、ここで初めて、俺の目を見た。

……………。

……………俺は気付くのが、いつも遅い。

佐々良もすっかりと、その目に意志を宿していることに、ただの人見知りキャラではないことに、今、気付いた。

「だから、葛平くんにお願いがあんの」

「……………俺にできることなら」

「うっん。葛平くんにはかできない」

「こんな、自分のことしか考えられない、俺にしか？」

「上に戻っても、みっちゃんを助けてあげてほしいの」

「私は、もう戻れないから。」

「卒業まででいいから、みっちゃんのそばにいてほしいの」

「私は一緒にいられないから。」

「自分勝手なお願いだって、分かってる」

「だから。」

と、佐々良はうつむく。

「だから、その代わりに私、今ここで葛平くんにかかれても、誰にも言わない」

……………。

……………あれ？

「ニユアンス、おかしくない？」

「心配しないで。鍵はちゃんと掛けておいたから」

「いや、そんな心配は一瞬もしてないんだが……………」

「一瞬どころか、刹那もしてない。」

「努力するから。声を出さないように努力するから」

「そんな努力もいらないし」

「だ、駄目だよ。ど、努力しないと。私、意外と声大きかったから」

「何の経験談かは、絶対言うなよ！」

「絶対、つてのは前振り？ 本当は聞く気満々？」

「違う！ 本気でNGの方の、絶対だ！」

「そんなこと言っときながら、熱湯風呂に入るタイプでしょ？ 葛

平くん」

「入らない！ 俺は風呂はぬるめが好きだ！」

意味のない告白をする、俺。

「あ。私もぬるめ。気が合うね。今度一緒に入るっか？」

「は……………入んねえよ！」

一瞬想像してしまった、俺。

刹那で答えるべきだった、俺。

情けないぞ、俺。

「葛平くんって結構面白い」

クスクス、と笑う佐々良。

「やっぱり、みっちゅんと気が合うと思う」

お風呂のことじゃなくてね、と付け足した。

「葛平くんにみっちゅんのこと、お願いして正解だった」

佐々良が優しく笑う。

「……俺はまだ、受けるとは言っていないぞ」

「うっん。葛平くんは受けてくれるよ」

俺の否定の言葉を、否定する。

そして、続けて言う。

「女の子の秘密を聞かされて、助けられない男の子なんて、いな

いもん」

……………。

……俺は気付くのが、いつも遅い。

佐々良が話し始めた時点で。

この部屋に来た時点で。

もしかしたら、俺が男の子として生まれた時点で。

選択肢も、選択権も、なかった。

雛村が勇者で、俺が格闘家で。

佐々良は、策士だった。

俺は気付くのが、いつも遅い。

大広間のソファアールで、俺は携帯電話をいじっていた。

アドレス帳に『佐々良沙雪』と表示されている。

ついさっきの話だ。

「アドレス、交換しよ」

倉庫にて、俺との約束を取り付けた佐々良は、自分の携帯電話を取り出した。

「とりあえず赤外線で送信するから、受信して」

「赤外線？ ああ暖かいやつか？」

「……あの。言いくいけど、そのポケ、面白くない」

「あ、いや……」

本気、なんだけど……。

「……ケータイ貸して。私がやるから」

言われるがまま、ポケットから携帯電話を取り出し、渡す。

そんなことも知らないのかよ的な、冷たい視線が痛い。

「はい。登録しといたよ」

あつという間に、携帯電話は帰ってきた。

一体、この短い間に何が？

アドレスって長いから、打ち込むのが大変なはずなのに。

「みつちよんのことでも何でも、気軽に連絡してね」

ああ、と返事をしようとして、ふと思う。

……あれ？

「ここ、地下だから圏外じゃないのか？」

地下通路では俺のも雛村のも、何度見ても圏外だった。

「ああ、それなら大丈夫。ヨウコさんが色々と改造して、大広間の周りはケータイ使えるみたい」

「色々と改造、ってすごく違法な感じがするんだけど」

「そんなこと言ったら、私たちの存在自体が違法っぽいよ」

「あ。いや……ごめん」

配慮が足りないな。本当に俺は。

「いや。こつちこそ、ごめんなさい。変な言い方しちゃった」

……………

……………佐々良は。

「佐々良はこれから、どうするんだ？」

「とりあえず、皆さんと一緒にここに住む。ママとは……もう会えないけど」

会えば危険な目に、遭わせるから。

「でも一方的にだけど、手紙くらいならいってヨウコさんが。ちよつと無理があるけど、私が駆け落ちしたって設定で。遠く離れているけど、幸せですって。多分それがママにとって一番安全で、安心だった」

自殺でお別れよりは、全然いい。

と、佐々良は笑った。

「そうか。何か、俺にもできることがあったら、連絡してくれ」

「うん、ありがとう。とりあえずは、倉庫整理、がんばって」

そう言って、佐々良はドアを開けた。

「私も今日から住む部屋を片付けなくちゃ」

バイバイ、と手を降る佐々良。

いつの間にか、人見知りキャラじゃなくなっていた。

それから程なくして、俺は倉庫整理を終えた。

そして、人観にその報告と、誤解消の確認をしようとして、先ほどのドーム、彼女が『ヨウコちゃんのアート知識の部屋』と呼ぶ断固俺は呼ばないが、所に行ってみたが、無人だった。

……………あいつ、どこ行ったんだよ？

人観も、影虎さんもいない。

ここの構造も大して知らないの、仕方なく大広間で待つことにした。

どこかの部屋から、雛村と佐々良の楽しげな声がする。本当に。

本当に、また会えて良かった、と思う。そんな二人の邪魔をするわけにはいかない。

と、言うか。

あんな二人を相手にするわけにはいかない。

多分、俺、弄ばれ倒される。

だから今、暇潰しに携帯電話をいじっている。

佐々良の言うとおり、アンテナは三本。電波良好。

新着メール問合せ。

……新着メール2件。

日付はどちらも、昨日の七月五日。時間も夕方の、同じような時間。

一通目は、明日木から。

二通目は……。

……………。

……できることなら、読みたくない。

ということ、先に明日木のメールを読むことにする。

これは現実逃避ではない。危険回避だ。

先に帰ったことを僕は怒らない。大人、になったからね。

それと、店先に放置してあった君の鞆は僕が預かってるよ。

もしも、だけど。

もし君が、あの日のようなことにまた巻き込まれているなら、今度こそ連絡してほしい。

ちなみにさつき妹君から心配の電話があったけど、今日は僕の家泊まるって言ったから。

だから、後悔だけはしないように。

って大層なメールをしました。

ではまた、月曜日に！



……  
…… 実に、怒っていらっしやる。

超怖い。鬼怖い。

正直、帰りたくない。

でも、帰らないと今度こそ殺される。

「お。もう終わったのか？ やはり君は早い男だな」と、少女の声が出た。

「……おう。俺は『作業』が早い男だから……な？」

俺は、相変わらずの軽口を叩く人観を見る。

ゆつくりと階段を下りてくる人観を。

その二本の足で歩く人観を。

「あんた……歩けたのか？」

俺の知っている人観は、車椅子の自称大人の少女だ。

出会ってから一度も、立ち上がることもすらなかった。

「当たり前だ。私のこの艶めかしい足は観賞用ではない」

いや、その棒のような足を観賞しようとは思わないけど。

「車椅子は歩くのが面倒なときに乗っているだけだ。人は見かけによらない。そう教えてもらう？」

階段を下りきり、こちらへと歩み寄る人観。

そして、

「だから」

俺と十分に距離を離して立ち止まり。

人観が十分な距離を取って立ち止まり。

「だから、君は戻れない」

左手に持った黒い塊を、俺の頭に向けた。

その白く繊細な手に不釣り合いな、黒く重厚な塊を。

……  
……  
「……あ、あんたの冗談には飽きた」

俺はソファ―に座っているんで、人観を見上げる形になった。

ただし、先ほどの佐々良との会話のような雰囲気は、一切ない。

「悪いが、これは本物だ。真正銘、弾の出る凶器だよ」

俺は微動だにできない いや、してはいけない。

人観の目が、恐ろしく、冷たい。

少女の姿に似つかわしくない目をしている。

「それにこれは私だけでなく、家族全員の意思だ」

その言葉を合図に、一階のドアがいくつが開き、人が出てきた。

そして全員がこちらに歩み寄り、俺を中心に立ち止まった。

男が三人。女が四人。

それぞれが、それぞれの服装。

ただし、共通点がある。

全員が赤か青の鬼のお面を着け、金属バットを持っていること。

「紹介が遅れたな。私の、家族だ」

そう言う人観の隣には、一際大きな赤鬼。

間違いなく、影虎さんだ。

あの親切丁寧な、影虎さんだ。

「君の情報がネット上に少ないから、みんなにわざわざ上に出向いて調べてもらっていたんだよ」

今、みんな出払っていてなあ。

人観は確かに、そう言っていた。

「そしてその結果、君が一昨年の夏に事件を起こしていることが分かった。色々と情報操作されていて、随分と時間が掛かったがね」

時間稼ぎに倉庫整理してもらって正解だったよ、と意地悪く笑う人観。

しかし、その目と姿勢に変化はない。

「そしてその結論、私は君に強い不安を抱いた。このまま帰してもいいものか、と」

「……だから、俺を殺すのか？」

本当に緊迫したとき、人間は意外と冷静みたいだ。

凶器を持った人間に囲まれた人間の末路が、よく分かる。

いや、こんなことは今どきの小学生でも分かる答えか。

「第一、私たちの秘密を知っている部外者を、そのまま帰すと思うか？」

君は少し人を疑った方がいい、と笑う。

「……部外者」

俺は人観の言葉を、繰り返す。

その言葉に当てはまる人間は、今ここに、二人いる。

俺と、もう一人。

「それは、雛村も、か？」

親友を命懸けで捜しにきた彼女も、か？

「安心してくれ。雛村美月は沙雪の親友だ。私の家族の、友人だ」  
そうだ。

人観は、家族に、甘い。

「だが、君は違う。ただの、クラスメイトだ」  
そうだ。

俺は、佐々良と、今日始めて会話したばかりだ。

「でも、なるべくなら彼女たちには気付かれずに済ませたい。なので、こちらを使わせてもらう」

そう言って、影虎さんが差し出したものを、姿勢を変えずに受け取った。

左手に持つ大きな黒い塊とは違う、小さな黒い塊を右手に。

そして、右手を俺の頭に向け、向けていた左手を下げた。

「こちらは音が出ないタイプだ。彼女たちが気付くことは、ない」

引き金に掛けた細く白い指に、静かに力が入る。

周りの鬼も、影虎さんも、静かにそれを見ている。

静かな空間で、雛村と佐々良の楽しげな声だけが聞こえる。

本当に、楽しげな声が。

「そうそう。忘れるところだった」

実に三下の台詞だが、一応言っておこう。

と、人観は俺に訊く。

「何か、言い残したことは？」

実に、意地悪な笑顔だ。

そして、ひどく冷たい目だ。

少女らしからぬ、大人の顔だ。

その顔をまっすぐと見据えて、

「約束守れなくてゴメン、と伝えてくれ」

俺は言った。

「約束？ 誰に？」

そこで、俺は笑う。

「自分で調べてくれ。人観『さん』は『大人』だろう？」

意地悪く、笑う。

「……そうか。分かった」

そして、人観も笑う。

少女らしからぬ、意地悪な、笑顔だった。

「これは君が、知らなければ良かっただけの話、だよ」

そして彼女は引き金を引いた。

「ふふ……ふはははは」

笑った。

「はははははははは」

笑っている。

「はははははははは」

涙を浮かべながら、笑っている。

「はは……ひい、ひい、ひい」

腹を抱えて、呼吸困難になっている

……いくらなんでも、笑いすぎだ。

つても、昨日見た気がする。

ただ、これは俺の回想ではない。

走馬灯タイムでもない。

一生で一度のチャンスを、俺はもう使い切っている。

だから、これは俺の回想ではない。

「いやあ、笑った笑った。こんなに笑ったのは、生まれて初めてだ」

涙を拭いながら、人観はようやく落ち着きを取り戻す。

周りの鬼も全員、お面を取っていた。

ただ、行動はそれぞれ。

笑う者。微笑む者。あきれる者。拍手する者。感心する者。無関

心な者。

影虎さんは、謝ってくれた。

「すみません、葛平さん。あなたを試させてもらいました」

こちらをお使いください、とタオルを渡してくれた。

「な、何があつたの？」

二階の通路で佐々良の隣にいる雛村は、大広間の光景を混乱と驚きの表情で見ている。

思い思いの行動を取る佐々良の家族と、顔が思いつき濡れている俺を。

「沙雪！」

人観が親指を立てた右の拳を、佐々良の方へ向ける。右に持っていた黒いおもちゃは、笑い倒した際に床に落としていた。

対する佐々良も、人観と同様の行動を取っていた。

意地悪な笑顔の、人観と佐々良。

「……てめえら、ゲルで騙してたのか」

濡れた顔を軽く拭い、俺は人観を睨みつけた。

「言っただろう。家族全員の意味だ、と」

人観が笑う。

意地悪く、楽しげな、笑顔で。

「それに、さっきまでのやりとりで私は嘘を一言も言っていない。

君の解釈の問題だ」

気になるなら、読み返してみるといい。それが小説の良さだ。と言つて、笑い続ける。

「……断る。ひどく恥ずかしい台詞を吐いていた気がする」

今の俺の顔は、前世のスイカよろしくのカラーリングだろう。それも中身の方の。

「何も恥ずかしがることはない。自身の危機的状況にて、君は他者の心配をした。私は君の将来が楽しみになつてきたよ」

そんなことを、楽しみ、ではない笑顔で言った。いや、これが彼女の、楽しみ、な笑顔だ。

「葛平七生。私は君を、十二分に信用できる人間と判断する」

まっすぐと俺の目を見て、人観が宣言する。

「知らなければ良かっただけの話を知つて、君も、元通りの生活には戻れないが、それでも君は、普通の人間、としてい続けてくれるだろう」

彼女が、そのペシヤンコな胸を張つて、言った。

「……ああ。俺はこれから先もずっと、普通の人間、だよ」  
「そうか、と嬉しそうに頷く人観。」

「私は、君のことが好きになれそうだよ」

「……………」

「……何気に、告白された。」

自分より年上の、少女らしからぬ少女に、告白された。

何故か、悪い気は、しなかった。

それから俺と雛村は、影虎さんに帰り道を案内してもらった。  
ただ、昨日歩いたり走ったりした通路ではない。

いわゆる隠し通路。ダンジョンではお馴染みのやつだ。

あつという間に、地上だ。

「これから是非、遊びにきてください」

最後の階段の前で、影虎さんが、雛村に言った。

「沙雪さんが喜びます」

相変わらずの無表情の影虎さんに対し、

「はい。またすぐに遊びに来ます」

満面の笑みで返す雛村。

そして、雛村は階段を上り始めた。

俺も一礼してから、階段を上った　いや、上ろうとした。

「あの。葛平さん」

影虎さんが、呼び止めた。

一段目に足を置いた状態で俺は立ち止まる。

それに気付かない雛村は、どんどんと上っていた。

「葛平さんも、また来てください」

「俺も、ですか？」

もうすぐ地上に出る雛村には、親友のいるここに来る理由がある。  
だけど、俺には、

「ヨウコさんが喜びます」

……弄ばれ倒される理由があった。

「それに」

いつでも無機質、無表情の影虎さんしか見たことなかった俺は、その変化にすぐには気付けなかった。

「それに、私も嬉しいです」

笑った。

美しい、笑顔だった。

気持ちの良い、笑顔だった。

それをもう一度見られるなら来てもいい、と思った。

「遅かったね。何か話してたの？」

地上に出ると、雛村が待っていてくれた。

「いや。別に……」

まだ高い太陽を眩しがるように、片手を顔にかざす　　いや、実際にには緩んだ表情を隠すための行動だが。

自分のことを僕と呼ぶ女の子には会ったことはないが、さえない男の子が突然モテモテになる展開は、案外あるのかもしれない。

立て続けに、二人に告白された。

人観と、影虎さんに。

よくよく考えればあれは告白ではない、という発想は今の俺にはない。

浮きに浮いて、浮かれている。

「そっいえば、さ」

雛村が話しかけてきて、俺は表情を引き締める。

浮かれていても顔に出さないのが、紳士だ。

「鬼の人に追われて逃げたときのこと、覚えてる？」

……。

「……ああ。覚えてる」

鬼に追われて逃げたときのことを。

雛村の手を握って逃げたときのことを。

恐怖の対象の男の手で、彼女に触れたときのことを。  
あまりにも自己中心な自分のことを。

俺は、覚えている。

忘れては、ならない。

「そのとき、さ」

雛村が、再び口を開く。

俺は、覚悟を決める。

知らなかった、なんて言い訳にはならないから。

知っている、から言い訳にはならないから。

「私のおっぱい、背中で感じてたでしょ？」

.....

.....

..... そっちかい！

「..... 必死だったから、よく覚えてねえな」

「はい、嘘。それ、嘘。その顔はすっかり覚えてる顔」

「とんだ言いがかりだ。俺は今まで一度も嘘なんてついたことがな

い

「はい、それも嘘。そんな台詞は嘘つきしか言わないんだよ」

「それも言いがかりだ。正直者だって同じ台詞を言える」

「だけど、葛平君は嘘つき。男はみんな、狼少年なのよ。いえ、男

はみんな、狼なのよ」

「..... なんか、話の趣旨が変わってきてないか？」

「いいの。私は作者に愛されてるから。お話を突然、バトルアクシ

ョンものに変えても、問題ないの」

「すごい権力を持っているんだな」

「ちなみに、葛平くんは作者に嫌われてるよ。すぐ言い訳するし、

ヘタレチキンだし、さらに作者を非難するから」

「ち、違う。あれは、その、言葉のあやで.....」

「ほら、すぐ言い訳。そんなんじゃ、次から主人公交代の強制退場

だね」

「……ごめんなさい、雛村さん。そして、作者さん。

「まあ、その話は置いて」

置いとくなよ。取りに戻れよ。俺のHP 存在そのものに大きく関わるわ。」

「とにかく、責任、取ってもらうからね」

「……………」  
責任、に対する、覚悟、は決めている。

「……………」  
「それじゃあ、俺は何をすればいいんだ？」

「私に一生服従」

「重っ！ 責任、重っ！」

「それなら、一生隷属」

「内容変わってないし！ むしろ悪化してる感があるし！」

「そうだなあ。最初の命令は、何にしようかなあ」

「聞いている？ 俺の話、聞いている？ 雛村さん」

「そうだ！」

ポン、と手を叩く雛村。

まるで何かのキャラのように。

「今度、私をデートに連れていきなさい」

何人も彼氏がいる私とデートできるなんて光荣だぞ、とウィンクする雛村。

……………」

……………」

男がみんな、狼少年なら。

お前は、狼少女だ。

「ただし」

そんなことを考えている俺など気にせず、雛村は続ける。

「デート中は手をつないで歩くこと……」

多分これは、この上ないハッピーエンドなんかじゃない。だけどきつと、この上ないバッドエンドでもない。この上なく普通な、この上ないノーマルエンドだ。だから俺は、普通な台詞で。小説の主人公としては、実に格好のつかない台詞で。このお話を、終わらせようと思う。

「了解。ご主人様」

終わりだと言っておいて、続けていることを、大変申し訳なく思っています。

再度登場、葛平七生です。

この話をするのを、読者の皆様が望んでいるとはとても思えない。

人観の言葉を借りるなら、無駄なこと。

知らなければ良かっただけの話。

だからもし、忙しければここでやめていただいて結構です。  
むしろ、そちらをお勧めします。

七月六日の土曜日、午後四時十七分。

この国では絶滅の危機に瀕していると聞く商店街の、端の端。い  
つそ商店街の中にはないと言った方がいいような場所。

そこに、俺はいた。

女郎花古書店、と看板の掛かる店の中に。

ついさっきの話だ。

「そういえば、これも返しておこう」

俺へのドッキリを終えた人観が、白い紙切れを差し出してきた。

ポケットにないことも忘れていた、一枚の名刺を。

「ん？ 反応が悪いな。あいつから情報を買って、ここまでやってきたんじゃないのか？」

あいつ？ 情報？ 買って？

「本当に知らないみたいだな。でも名刺を持っているということは、  
君が商売相手ということは間違いないだろう」

商売相手？ ますます分からない。

「まあ、それは本人に直接訊いてみるといい。あいつはダメ人間だ

が、嘘だけは言わないから」

「真実も言わない可能性もあるが、と人観は楽しくなさそうに笑う。「それにしても、あいつの商売相手を処分せずに済んでよかった。もしかしたらこの貸しで、借金を踏み倒せるかもしれない」

意地悪く、楽しそうに、笑う。

「おめでとうございます。ヨウコさん」

無機質、無表情で影虎さんが祝福した。

そして地上に戻り、そのまま家にも帰らずに俺はここに来た。

「お。葛平くん。二日ぶりだね。無事で何より」

相変わらずの、心のない彼の言葉。

「……その格好は何だ？」

「失礼だね、葛平くん。僕は何かのキャラじゃないんだから、いつも同じ格好でいるわけじゃないんだよ」

人観くんはいつも同じような服だけだね、と付け足した。

「違う。何故ウチの高校のジャージを着ているのか、と訊いたんだ」  
「女郎花は、独楽原高校指定ジャージを着て、本棚の並ぶ店内の奥の小さな座敷のような所に、あぐらで座っていた。」

「理由は簡単。僕があそこの卒業生だからさ。つまり葛平くんの先輩さ。で、どうだい？ 少しは若く見えるかい？」

……だから、そうというのが若くない。

「で、求めた真実には辿り着けたかい？」

「……一体、あんたは何者だ？」

「ただの、古書店店主さ。副業で真実を売り買いしているけどね」

「真実を、売り買い？」

「うん。そう。だからあのとき、雛村くんの居場所を売ってあげた」

「……買った覚えはないぞ」

「まあ。初回はサービスだからね。次からはちゃんと対価をもらおうよ」

よっこらしよ、と声を出して正座に座り直す女郎花。

その掛け声が、とことん若くない。

「とはいえ、無料ってわけでもない」

「やっぱり金取るのかよ」

「いやいや。そうじゃない。ただ、葛平くんが今回知った真実を、僕に教えてくれるだけでいい」

「真実？ そんな大層なもん、知らねえぞ」

「別に難しく考えなくていいよ。葛平くんが見たこと、感じたこと、思ったことを話してくれるだけで、いい」

「……………」

「……………胡散臭いが、話すしか、ないようだ。」

「……………どこから話せばいい？」

「僕と別れたところから、お願いするよ」

「そうか。それじゃあ」

「……………で、以上だ」

「うんうん、と頷いている女郎花。」

決して話し上手ではない俺の話を、しっかりと必要なところでは相槌を打って、静かに彼は聞いていた。

女郎花は、とてつもない聞き上手だった。

途中、自分が話し上手になったような錯覚さえ感じた。

「つまり」

俺が話し終えて、女郎花が口を開く。

「さえない葛平くんが突然モテモテになった、という話だね」

「……………」

「その結論は、不適當極まりないな」

「ちなみにだけど、僕の姪っ子は自分のことを僕と呼ぶよ」

「その補足も、不必要極まりない」

「……………だけど、そんな人間が実在することには驚きだ。」

「まあ、まだ五歳だからね。あ。これも、ちなみにだけど、これは伏線ではないよ。僕の姪っ子がこの小説に出ることは、絶対にない」

から」

「……その、絶対、は前振りか？」

「いやいや。これは、本当の本当。職業柄、僕は嘘をつかないことにしてるんだ」

よっこらしよ、とあぐらに戻す女郎花。

「でも、葛平くんの妹さんは伏線だと、僕は思っよ。次の話にきくと登場するよ。だから、妹さんがまた怒らないように今日は早めに帰った方がいいよ」

……余計なお世話だ。

でも、正論だ。

「ああ。それじゃあ、失礼させてもらっよ。女郎花」

「うん。さようなら、葛平くん」

俺は女郎花に背を向け、歩き出す　いや、歩き出そうとした。

「ああ。そうだ」

女郎花が呼び止める。

相変わらず、加速を許さない男だ。

俺は立ち止まり、振り返る。

「またのご来店をお待ちしております」

につこり、と営業スマイルの女郎花。

……胡散臭え。超胡散臭え。

「……機会が、あつたらな」

そして、俺はようやく帰路についた。

明日は、七月七日の日曜日。

もうすぐで、高校最後の夏休み。

その夏休みを迎える前に俺は、過去最悪の誕生日を迎えることになるのだが、それはまた別の話。

あなたが、知らなければ良いだけの話、かもしれない。

## 1・17（後書き）

以上、人間フルスペックでした。

連日連載という長い時間お付き合い頂き、本当にありがとうございました。

今拙作は電撃大賞落選作ですので大変お見苦しいモノとなっておりますと思いますが、それでも楽しんで頂けたなら嬉しい限りです。

また、次のための勉強として本格インドカーから星の王子様までの感想・批評を募集しておりますので、何かお気付きの点がございましたら是非ともお願い致します。

ではでは、ここまで読んで下さった貴方に最大級の感謝を！

追伸：感想・批評を下さった方へ……

より多くの方の言葉をお聞きしたいので、しばらくの間、改稿せず応募したままの文章を載せたいと思っています。

全然アドバイス聞いてないじゃないか、とお思いの方。どうか叱らないで下さい。あ、いや、叱られるのも嫌いでは（以下略

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4759m/>

---

人間フルスペック

2010年10月8日12時22分発行